

河明り

岡本かの子

青空文庫

私が、いま書き続けている物語の中の主要人物の娘の性格に、何か物足りないものがあるので、これはいつそのこと環境を移して、雰囲気でも変えたらと思いつくと、大川の満^みち干^ひの潮がひたひたと窓近く感じられる河沿いの家を、私の心は頻^{しき}りに望んで来るのであった。自分から快適の予想をして行くような場所なら、却^{かえ}つてそこで惰^{なま}けて仕舞いそうな危険は充分ある。しかし、私はこの望みに従うより仕方がなかった。

人間に交っていると、うつらうつらまだ立ち初めもせぬ野山の霞^{かすみおも}を想い、山河に引き添っているとき、激しくありとしまない人が想われる。

この妙な私の性分に従えば、心の一隅の危険な望みを許すことによつて、自然の觀照の中からひよつとしたら、物語の中の物足らぬ娘の性格を見出す新たな情熱が生れて来るかも知れない——その河沿いの家で——私は今、山河に添うと云つたが、私は殊にもこの頃は水を憶おもつていたのであつた。私は差しあたりどうしても水のほとりに行き度たいのであつた。

東京の東寄りを流れる水流の両国橋辺りから上を隅田川と云い、それから下を大川と云つている。この水流に架かる十筋の橋々を縫うように渡り検めて、私は流の上下の河岸を万まんべん遍なく探してみた。料亭など借りるのは出来過ぎてゐるし、寮は人を介して頼み込むのが大おおぎよう仰ようだし、その他に頃合いの家を探すのであるが、

とかく女の身は不自由である。私は、今度は大川から引き水の堀割りを探してみた。

白木屋横手から、まず永代橋詰まで行くつもりで、その道筋の二つ目の橋を渡る手前にさしかかると、左の河並に横町がある。私有道路らしく道幅を狭めて貨物を横たえているが、陸側は住居附きの蔵構えの間屋店が並び、河岸側は荷揚げ小屋の間にしんかんとした洋館が、まばらに挟っている。初冬に入って間もないあたたかい日で、照るともなく照る底明るい光線のためかも知れない、この一劃^{いっかく}だけ都会の麻痺^{まひ}が除かれていて、しかもその冴^さえ方は生々しくはなかった。私はその横道へ入って行った。

河岸側の洋館はたいがい事務所の看板が懸けてあった。その中

の一つの珉瑯質ほうろうしつの壁に蔦つたの蔓つるが張り付いている三階建の、多少住み古した跡はあるが、間に合せ建ではないそのポーチに小さく貸間ありと紙札が貼はつてあつた。ポーチから奥へ抜けている少し勾配こうばいのある通路の突き当りに水も覗のぞいていた。私はよくも見つけ当てたというよりは、何だか当然のような気がした。望みというものは、意固地いこじになつて詰め寄りさえしなければ、現実はいつか応じて来るものだ。私が水辺に家を探し始めてから二ヶ月半かかつている。

二三度「ご免下さい」と云つたが、返事がない。取り付きの角ガラスまどの室を硝子窓から覗くと、薄暗い中に卓テーブル子のまわりへ椅子いすが逆にして引掛けてあり、塵ちりもかなり溜たまつている様子である。私は

道を距へだてて陸側の庫造りの店の前に働いている店員に、理由を話して訊たずねて見た。するとその店員は家の中へ向つて伸び上り、

「お嬢さーん」と大きな声で呼んだ。

九曜星の紋のある中仕切りの暖簾のれんを分けて、袂たもとを口角に当てて、出て来た娘を私はあまりの美しさにまじまじと見詰めてしまった。頬ほおの豊かな面長の顔で、それに相応ふさわしい目鼻立ちは捌さばけてついているが、いずれもしたたかに露を帯びていた。身丈も格幅かっぶくのよい長身だが滞なく撓しなった。一たい女が美しい女を眼の前に置き、すぐにそうじろじろ見詰められるものではない。けれども、この娘には女と女と出会って、すぐ探り合うあの鉤針かぎばりのような何もものもない。そして、私を気易くしたのは、この娘が自分で自分の

美しさを意識して所作しよさする二重なものを持たないらしい気配いである。そのことは一目で女には判る。

娘は何か物を喰たべかけていたらしく、片袖かたそでの裏で口の中ものを仕末して、自分の忍び笑いで、自然に私からも笑顔を誘い出しながら

「失礼いたしました。あの何かご用——」

そして私がちよつと河岸の洋館の方へ首を振り向けてから用向きを話そうとする、その間に私の洋傘を持ち仕事鞆しごとかばんを提げている、いくらか旅仕度にも取れる様子を見て取つたらしい娘は

「あ、判りました。部屋をお見せいたすのでしよう」といったが「けれども……あんな部屋」とまた云つて私と向う側の貸間札の

かかっている部屋の硝子扉を見較べた。私はやや失望したが、この娘に対して少しも憊ひがんだり気おくれはしない「……あのとにかく見せて頂けないでしょうか」すると娘はまたはつきりした笑顔になり

「では、とにかく、」と云つてそこにある麻裏草履あさうらぞうりを突かけて、先に立つた。

三階は後で判つたことだがこの雑貨貿易商である娘の店の若い店員たちの寝泊りにあててあり、二階の二室と地階の奥の一つ、これも貸部屋では無かつた。たった一つ空いているといい、私に貸すことの出来るという部屋は、さつき私が覗いた道路向きの事務室であつた。

私が本意なく思つて、「書きものための計画」のことを少し話してみると、娘はちよつと考えていたが

「よろしゅうございます。じゃ、こちらの部屋をお貸しいたしましよう」と更あらためて決心でもした様子でそれと背中合せの、さつき塞ふさがつているといった奥の河沿いの部屋へ連れて行つた。

その部屋は日本座敷に作つてあつて、長押なげしつ附きのかなり凝つた造ぞうさく作だつた。「もとは父の住む部屋に作つたのでございます」と娘はいつた。貸部屋をする位なら、あんな事務室だけを扱つて貸さずにこの位の部屋の空いているのを何故貸さないのかと私はあとでその事情は判つたけれどその時は何も知らないので不審に思つた。

ともかく私は娘の厚意を嬉よろこんでそして

「では明日からでも、拝借いたします。」

そう云つて、娘に送られて表へ出た。私はその娘の身なりは別に普通の年頃の娘と違つていないが、じかに身につけているものに、茶絹で慥すねらえて、手首まで覆つている肌襦はだシヤツ衣ももひきのようなものだの、脛すねにぴっちりついている裾裏すそうらと共色の股引ももひきを穿はいているのを異様に思った。私がそれ等に気がついたらと見て取ると、娘は、

「變つて居りました。なにしろ男の中に立ち混つて働くのですから、ちと武装しておりませんとね。」

といつて、軽く会釈して、さっさと店の方へ戻つていった。

あくる日に行つてみると、私に決めた部屋はすつかり片付いて、丸窓の下に堆ついでしゆ朱の机と、その横に花梨かりんどう胴の小長火鉢まで据えられていた。

そこへ娘は前の日と同じ服装で、果くだもの鉢と水差しを持って入つて来た。

「どういふご趣味でいらつしやるか判りませんので、普通のことにして置きました。が、もし、お好きなら古い書画のようなものも少しはございますし……」

そこで果物鉢を差出して

「こういうふうなものなら家の商品でまだ沢山ございますから、遠慮なく仰おつしやつて下さいまし」

果物鉢は南洋風の焼物だし中には皮が濡ぬれいろ色をしている南洋生の竜眼りゆうがん肉が入っていた。

私はその鉢や竜眼肉を見てふと気付いて、

「お店は南洋の方の貿易関係でもなすつていらつしやるのですかと訊きいた。

「はあ、店そのものの商売は、直接ではございませんが、道楽と申しましょうか、船を一ぱい持って居りまして、それが近年、あちらの方へ往き来いたしますので……」

娘の父の老主人はリヨウマチで身体の不自由なこともあり、

気も弱くなつて、なるたけ事業を縮小したがっている。しかし、店のものの一人に、強情に貿易のことを主張する男がいる。その男は始終船に乗つて海上に勤め、そして娘は店で老主人の代りに、^{てわ}手別けして働いている。娘は簡潔に家の事情をここまで話した。そして、その船貿易を主張する店のものに就^ついて、なおこ^う云つて私の意見を訊いた。

「その男の水の上の好きなことと申しましたら、まるで海亀^{かわうそ}か獺^このような男でございます。陸へ上つて一日もするともう頭が痛くなる^と申すのでございます。あなたさまは物をお書きになつて、いろいろお調べでございましょうが、そんな性質の人間もあるの^でございましょうか」

と云つたが、すぐ氣を変えて、「まあ、お仕事始めのお邪魔をいたしましたして、またいずれお暇のとき、ゆつくりお話を承りとうございますわ」と、火鉢の火の灰を払って炭をつぎ、鉄瓶へ水を注し足してから、爽やかな足取りで出て行つた。

爛漫らんまんと咲き溢あふれている花の華麗。

竹を割つた中身があまりに洞うつつろすぎる寂しさ。

こんな二つの矛盾を、一人の娘が備えていることが、私の氣になつて来たし、この娘の快活の中に心がかかりであるらしいその店員との関係も、考えられた。

私は何だか来てしまつて見ると、期待したほどの慾も起らない河面の景色を、それでも好奇心で障子を開けてみた。硝子戸ガラスどを越

して、荷船が一ぱい入って向うの岸は見えない。その歩あゆび板の上に、さき程の娘は、もう水揚げ帳を持って、万年筆の先で荷夫たちを指揮している姿が眺められた。

私は毎日河沿いの部屋へ通った。叔母と一緒に昼飯を済ませ、ざつと家の中を片付けて、女中に留守中の用事を云いつけてから出かけた。化粧や着物はたいして手数がかからなかった。見られる同性というならば、あの娘ぐらいなもので、その娘は他人に対するせんさくそういう詮索には全然注意力を持たないらしかった。それは私を気易くさせた。

この宿の堆ついでしゆ朱の机の前に座つて、片手を小長火鉢したんの紫檀したんの縁かぎに翳しながら、晩秋から冬に入りかける河面を丸窓から眺めて、私は大かた半日同じ姿勢で為すことなく暮した。

河は私の思つたほど、静かなものではなかつた。始終船が往き来した。殊に夕暮前は泊りの場所へ急ぐ船で河は行き詰つた。片手に水竿みずざおを控え、彼方此方に佇たたずんで当惑する船夫の姿は、河面に蓋ふたをした広い一面板に撒まき散ちらした箱庭の人形のように見えた。船夫たちは口々に何やら判らない言葉で怒鳴つた。舷ふなばたで米を炊いでいる女も、首を挙げて怒鳴つた。水上警察の巡邏船じゆんらせんが来て整理をつけた。

娘は滅多に來ないで、小女のやまというのが私の部屋の用を足

した。私はその小女から、帆柱を横たえた和船型の大きな船を五大力ということだの、木履ぼつくりのように膨れて黒いのは達磨だるまぶねと
いうことだの、伝馬船てんませんと荷足り船にたぶねの区別をも教えて貰った。

しかし、そんな智識が私の現在の目的に何の関りがあるろう。私
が書いている物語の娘に附与したい性格を囁ささやいて呉くれそうな一いち
光閃うせんも、一陰翳いちいんえいもこの河面からは射さして来ない。却かえつてだん
だん川にも陸の上と同じような事務生活の延長したものが見出さ
れて来る。私がこういう部屋を望んだ動機がそもそも夢だったの
だろうか。

すでにこの河面に嫌厭けんえんたるものを萌きざしているその上に、私は
とかく後に心を牽ひかれた。何という不思議なこの家の娘であろう。

この娘にも一光閃も、一陰翳もない。ただ寂しいと云えばあまりに爛漫として美しく咲き乱れ、そして、ぴしぴし働いている。それがどういう目的のために何の情熱からということもなく快闊かいかつそのものが働くことを藉かりて、時間と空間を缺はきみ刻んで行くとか思えない。内にも外にも虚白なものの感じられるのを、却って同じ女としての私が無関心でいられる筈はずがなかった。

娘はその後、二度程私の部屋に來た。一度は「ほんとに気がつきませんで……」と行って、三面鏡の化粧台を店員たちに運ばせて、程よい光線の窓際に据すえて行つた。一度は漢和の字引をお持ちでしたらと借りに來て、私がここまでは持つて來ないのを知り、「お邪魔いたしましたわ」と行ってあつさり去つた。

私がまだ意識の底に残している、娘と何等かの関係ありそうな海好きの店員のこと、娘は忘れたかのように、すこしの消息も伝えない。私の多少当が外れた気持ち、私がこの家へ出入のとき、目に映る店先での娘の姿や、窓越しに見るはしけいた舳はしけいた板の上の娘の姿にだんだん凝って行くのであった。私の仕事しごと鞆かばんは徒いたずらに開かれて閉されるばかりである。

私はだいぶ慣れて来た小女のやまに訊いてみた。

「お嬢さんはどういう方」

するとやまは難かしい試験の問題のようにはばらく考えて、

「さあ、どういう方と申しまして……あれきりの方でございませう」

私はこのませた返事に微笑した。

「この近所では亀島河岸のモダン乙姫おとひめと申しております」

私の微笑は深まった。

「他所よそへお出になることがあって」

「滅多に、でも、お買ものの時や、お店のお交際つきあいには時たまお

出かけになります」

「お店のお交際というと……」

私は娘の活動範囲が、そこまで圏をひろ拡げているのに驚ろいた。

「よくは存じませんですが、組合のご相談だの、宴会だの。きょうも船の新造卸しのお昼のご宴会に深川までお出かけになりましたが……」

その夕方帰り仕度をしている私の部屋の前で、娘の声でした。

「まだお在いでになりました」

盛装して一流の芸者とも見える娘。娘に「ちよつと入つて頂ちよう

戴だい」と云われて、そのあとから若い芸妓げいぎが二人とお雛妓しやくが一人現れた。

部屋の主あるじは私女一人なのに、外来の女たちはちよつと戸惑つた

ようだが、娘が紹介すると堅苦しく挨拶あいさつして、私が差出した小長火鉢にも手を翳かざさず、娘から少し退つて神妙に座つた。いずれもかなりの器量だが、娘の素晴らしい器量のために皺しわめられて見えた。

娘は私には「この人たち宴会場から送つて来て呉れたのですけ

れど、筆をお執りになる方には何かのご経験と思いついて、ちよつとお部屋へ上つて貰いましたの」といった。

少しの間、窮屈な空気が漂っていたが、娘は何も感じないらしく、「みなさん、こちらに面白そうなことを少し話してあげてください」というにつれ、私も、「どうぞ」と寛いだ様子くつろを出来るだけ示したので、女たちは、「じゃ、まず、一ぷくさせて頂いて：」と袂たもとからキルク口の蓑たばこを出して、煙を内端に吹きながら話した。

今までいた宴会の趣旨の船の新造卸しから連想するためか、水の上の人々が酒樓に上ったときの話が多かつた。

船に乗りつけている人々はどんなに気取つても歩きつきで判る

のである。畳の上ではそれほどでもないが、廊下のような板敷きへかかると船の傾きを踏み試めすような蛙股の癖が出て、踏み締め、踏み締め、身体の平定をはか衡つて行くからである。一座の中でひどく酔つた連れの一人が洗面所へ行つたが、その帰りに料亭の複雑な部屋のどこかへ紛れ込んで、探しても判らなかつた。すると他の連中は、その連れの一人が乗組んでいる船の名を声を揃えて呼んだ。

「福神丸やーイ」

すると、「おーい」と返事があつて、紛れた客があらぬ方からひよっこり現れた。

ある一軒の料亭で船乗りの宴会があつた。少し酔つて来るとみ

な料理が不味いと云い出した。苦笑した料理方が、次から出す料理には碗にも焼ものにも塩一つまみずつ投げ入れて出した。すると客はだいぶ美味しくなったといった。それほど船乗りの舌は鹹味に強くなっている。

きようはいい塩梅に船もそう混まないで、引潮の岸の河底が干潟になり、それに映って日暮れ近い穏かな初冬の陽が静かに褪めかけている。鴨が来て漁っている。向う岸は倉庫と倉庫の間の空地に、紅殻色で塗った柵の中に小さい稲荷と鳥居が見え、子供が石蹴りしている。

さすがに話術を鍛えた近頃の下町の芸妓の話は、巧まらずして面白かったが、自分の差当りの作品への焦慮からこんな話を喜んで

聞いているほど、作家の心から遊離していいものかどうか、私の興味は臆おくしながら、牽ひき入れられて行つた。

ふと年少らしい芸妓が、部屋の上下周囲を見廻みまわしながら

「このお部屋、大旦那おおだんなが母屋へお越しになつてから、暫しばらく木ノさんがいらしつたんでしよう……」と云つた。

娘は黙つてごく普通に肯うなずいて見せた。

「木ノさんからお便りありまして……」と同じ芸者はまた娘に訊きいた。

「ええ、しよつちゆう」と娘はまた普通に答えて、次にこの芸妓の口から出す言葉をほぼ予測したらしく、面白そうに嬌きようぜん然ぜんと笑つてこんどは娘の方から芸妓の言葉を待受けた。芸妓は果して

「あら、ご馳走さま、妬けますわ」と燥いでいった。

「ところが、事務のことばかりの手紙で」

芸妓はこの娘が隠し立てしたり、人を逸らかしたりする性分ではないのを信じているらしく、それを訊くと同時に、

「やっぱり——」と云つて興醒め顔に口を噤んだ。

「そう申しちや何ですけれど、あたしはお嬢さんがあんまり伎倆がなさ過ぎると思いますわ」

と今度は年長の芸妓が云つた。「これだけのご器量をお持ちになりながら……」

娘は始めて当惑の様子を姿態に見せた。

「あたしは、随分、あの人の気性に合うよう努めているんだけれ

ど……なによ、その伎倆つていうの」

年長の芸妓は物事の真面目まじめな相談に与あずかするように、私が押し出してやってある長火鉢あぶに分別らしく、手を焙あぶりながら、でもその時急に私の方を顧慮する様子をして

「ですが、こちらさんにこんなお話お聞かせして好いんですか」
「ええ、ええ」

娘の悪びれないその返事が如何にも私に対する信頼と親しみの響きとして私にひびいた。先程からの仕事への焦慮もすっかり和んで、むしろ私はその場の話を進行させるためにことさら自らの態度を寛がせさえするのであった。年長の芸妓は安心したように元の様子に戻って

「ま、譬たとえて云つてみれば、拗すねてみたり、氣を持たせてみたり」
娘は声を立てて笑つた。「そのくらいのことなら、前に随分あ
たしだつて……」

私はこの娘に今まで見落していたものを見出して来たような氣
がした。芸妓は手持無沙汰てもちぶさたになつて、

「そうでございますかねえ、じゃ、ま、抓つかつても見たり……」と
冗談にして、自分を救つたが、誰も笑わなかつた。

すると若い芸妓の方がまた

「だめ、だめ、そんな普通な手じゃ。あたしいつか、こちらさま
の大旦那の還曆のご祝儀がございましたわね。あのお手伝いに伺
いましたとき」といつて言葉を切り、そしていい繼いだ。「酔つ

た振りして、木ノさんの膝ひざに靠もたれかかつてやりました。いろ気は微塵みじんもありません。お嬢さんにやあ濟まないけど、お嬢さんの為めとも思つて、お嬢さんほどの女をじらしぬくあの評判の女嫌いの磐石板ばんじやくいたをどうかして一ぺん試してやりたいと思ひましたから。すると、あの磐石板はわたしの手をそつと執つたから、ははあ、この男、女に向けて挨拶あいさつぐらゐは心得てると、腹の中で感心してますと、どうでしょう、それはわたしが本当に酔つてるか酔つてないか脉みやくを見たのですわ。それから手首を離して、そこにあつた盃を執り上げると、ちよろりとあたしの鼻しづくの先へ雫を一つ垂らして、こここのところのペンキが剥はげてら、船渠ドックへ行つて塗り直して来いと云うんです。あたしは口惜しいの何のつて、……で

もね、そうしたあとで、あの人を見ても、別に意地の悪い様子もなく、ただ月の出を眺めてるようにぼんやりお酒を飲んでる調子は、誰だって怒る気なんかなくなっちゃいますわ。あたしは、つい、有難うございますとお叩頭じぎして指図通り、顔を直しに行っただけですけれど、全く」と年下の芸妓は力を籠こめた。

「全く、お嬢さんでなくても、木ノさんには匙さしを投げます」と云った。

新造卸しの引出物の折菓子を与えられて、唇の紅を乱して食べていた雛妓おしやくが、座を取持ち顔に、「愛嬌あいきよう喚わめき」をした。

「結婚しちまえ！」

これに対しても娘は真面目に答えた。

「厄介なのは、そんなことじゃないんだよ」「そもそも、お嬢さんに伺いますが、あんたあの方に、どのくらい惚ほれていらつしやるんです。まあ、お許いいなすけ婚けだから、惚れるの惚れないのという係り筋は通り越していらつしやるんでしようけれど」

すると娘は、俄にわかに、ふだん私が見慣れて来た爛漫らんまんとした花に咲き戻つて、朗に笑つた。

「この話は、まあ、この程度にして……こちらさまも一つ話ではお飽きでしょうから」

「そうでございましたわね」と芸妓たちも気がついて云つた。

私は帰る時機と思つて、挨拶した。

河かわ霧もやが立ち籠めてきた河岸通りの店々が、早く表戸を降して

いる通りへ私は出た。

三四日、私は河沿いの部屋へ通うことを休んで見た。折角自然から感得したいと思うものを、娘やそのほか妙なことから影響で、妨げられるのが、何か不服に思えて来たからである。いつそ旅に出ようか、普通通りすがりの旅客として水辺の旅館に滞在するならば、なんの絆きずなも出来るわけではない。明け暮れただ河面を眺め乍らなが、張り亘わたった意識の中から知らず知らず磨き出されて来る作家本能の触角で、私の物語の娘に書き加える性格をゆくりなく捕捉ほそくできるかも知れない。私のこの最初の方図は障しょうがい碍がいに遭あつ

て、ますますはつきり私に慾望化して来た。

ふと、過去に泊つて忘れていたそれ等の宿の情景が燻くすぶるように
思ひ出されて来る。

鱧はもを焼く匂いにおの末に中の島公園の小松林が見渡せる大阪天満川
の宿、橋を渡る下駄の音に混つて、夜も昼も潺せんかん援べにガラスの音を絶やさ
ぬ京都四條河原の宿、水も砂も船もいろいろの紅硝子べにガラスのように斜
陽のいろに透き通る明るいつ夕暮に釣人が鯊魚はぜを釣っている広島太
田川の宿。

水天髻すいてんほうこつ髻この間に毛筋ほどの長堤を横たえ、その上に、家五

六軒だけしか対岸に見せない利根川の佐原の宿、干瓢かんぴょうを干す

その晒さらした色と、その晒した匂いとが、寂しい眠りを誘う宇都宮

の田川の宿——その他川の名は忘れても川の性格ばかりは、意識に織り込まれているものが次々と思ひうか泛べられて来た。何処でも町のあるところには必ず川が通っていた。そして、その水煙と水光とが微妙に節奏する刹那せつなに明確な現実的人間性が劃かく出しゅつされて来るのが、私に今まで度々の実例があつた。東洋人の、幾多古人の芸術家が「身を賭かけて白雲に駕がし、」とか、「幻に住さん」などということねがを希ねがっている。必ずしも自然を需もとめるのではあるまい。より以上の人間性をと、つき詰めて行くのでもあろう。

「青山せいざん 愛あい 執しゅうの色に塗られ、」 「緑りよくすい 水すい、非怨ひえんの糸を永く曳ひく」などという古人の詩を見ても人間現象の姿を、むしろ現象界で確捕出来ず所詮しよせん、自然悠久の姿に於て見ようとする激しい

意慾の果の作略さりやくを証拠立てている。

だが、私は待て、と自分に云つて考える。それ等の宿々の情景はみな偶然に行きつき泊つて、感得したもののばかりである。今、再びそれを捉えようとして、予定して行つて見ても、恐らくその情景はもうそこにはいまい。ただの河、ただの水の流れになつて、私の希望を嘲笑あざわらうであろう。思出ばかりがそれらの俤おもかげを止めているものであろう。観念が思想に悪いように、予定は芸術に悪い。まして計画設備は生むことに何の力もない。それは恋愛によく似ている。では……私はどうしたらいいであろうと途方にくれるのであつた。だが、私は創作上こういう取り止めない状態に陥ることには、慣れてもいた。強いて焦せつても仕方がない、その状態

に堪えていて苦しい経験の末に教えられたことも度々ある。そう
あきらめて私は叔母と共に住む家庭の日常生活を普通に送り乍ら、
その間に旅行案内や地図を漁ることも怠らなかつた。また四五日
休みは続いた。

すると娘から電話がかかつて来た。

「その後いらつしやらないので、この間芸者達とお邪魔したのが
悪かったかと思つたりして居りますが……」

声は相変わらず闊かつたつ達だが、気持ちほこまかく行ゆきわた亘わたつて響いて
来た。

「何も怒ることなぞ、ありませんわ。お休みしたのはちよつと仕
事の都合で」

と答えた。

「いかがでございましょう。父がこのごろ天気続きの為めか、身体がだいぶよろしゅうございますので、お茶一つ差上げたいと申しますが、明日あたりお昼飯あがり傍々かたがた、いらして頂けないでございましょうか、お相客はどなたもございませぬ。私だけがお相伴さして頂きます」

私はまたしても、河沿いの家の人事に絡み込まれるのを危く感じたが、それよりも、いまの取り止めない状態に於て、過剰になつた心にああいう下町の閉された蔵造りの中の生活内部を覗くのぞことに興味が弾んだ。私は招待に応じた。

東京下町の蔵住いの中に、こんな異境の感じのする世界があるうとは思いかけなかった。

四畳半の茶室だが、床柱は椰子材やしざいの磨いたものだし、床縁や炉縁も熱帯材らしいものが使つてあつた。

は匍い上りから外は、型ばかりだが、それでも庭になつていて、りゆうぜつらん竜舌蘭だの、その他熱帯植物が使われていた。土人が銭に使うという中央に穴のある石が筑波井風つくばいふうに置いてあつた。

庭も茶室もまだこの異趣の材料を使いこなせないところがあつて、ひぞく鄙俗の調子を帯びていた。

はかま袴をつけた老主人が現れて

「手料理で、何か工夫したものを差上ぐべきですが、何しろ、手前の体がこのようでは、ろくに指図も出来ませんが、それで失礼ですが、略式に願つて、料理屋のものでご免を頂きます」と叮嚀ていねいに一礼した。

私は物堅いの少し驚ろいて、そして出しなにぎようぎよう仰々しいとは思ひながら、招待の紋服を着て来たことを、自分で手柄に思つた。娘もこの間の宴会帰りとは違つた隠し紋のある裾模様すそもようをひいている。

小薩張りこざつぱした服装に改めた店員が、膳ぜんを運んで来た。小おんなのやまは料理を廊下まで取次ぐらしく、襖ふすまぐち口からちらりと覗いて目礼した。

「お見かけしたところ、お父さまは別にどこといって」というと、
「いえ、あれで、から駄目なのでございます。少し体を使うと、
その使ったところから痛み出して、そりや酷いのですわ」

「まあ、それじゃ、今日のおもてなしも、体のご無理になりやしませんこと」

「なに、関わないのでございますよ。あなたさまには、いろいろお話し申したいことがあると云って、張切って居るんでございませから」

纏縛てんぱくという言葉が、ちらと私の頭を掠かすめて過ぎた。しかし、私は眼の前の会席膳かいせきぜんの食品の鮮やかさに強て念頭ねんくを拭ぬぐった。

季節をさまで先走らない、そして実質的に食べられるものを親

切に選んであつた。特に女の眼を悦よろこばせそうな冬菜ふゆなは、形のまま青く茹ゆで上げ、小鳥は肉を磨すり潰つぶして、枇杷びわの花の形に練り慥たえてあつた。そして、皿さかなの肴さかなには、霰あられの降るときは水面に浮き跳ねて悦ぶという琵琶湖の杜父魚かくぶつを使つて空揚げにしてあるなぞは、料理人になかなか油断のならない用意あるがことを懐おもわせた。

私も娘も二人きりで遠慮なく食べた。私は二三町も行けば大都會のビジネス・センターの主要道路が通つているこの界隈かいわいの中に、こうも幻想のような部屋のあるのを不思議とも思わなくなり、また、娘がいつもと違つた人間のようにしみじみして来たことも、たつて詮せん索心さくしんが起らず、ただ、あまりに違つた興味ある世界に唐突に移された生物の、あらゆる感覚の蓋ふたを開いて、新奇な

空気を吸収する、その眠たいまでに精神が表皮化して仕舞う忘我の心持ちに自分を托した。一つにはこの庭と茶室の一劃は、蔵住いと奥倉庫の間の架け渡しを、温室仕立てにしてあるもので、水気の多い温気が、身体を擡げるように籠って来るからでもある。

蘭科の花の匂いが、閉て切つてあるここまで匂つて来る。

「あなたさまは、今度のお仕事のプランをお立てになる前から、河は好きでいらつしやいましたの」

私はざつと考えて、「まずね」と答えた。

「それじゃ、今度、わたくしご案内いたしましょうか。東京の川なら少しは存じています」

そう云つて、娘は河のことを語つた。ここから近くにあつて、
そとほり外濠から隅田川に通ずるものには、日本橋川、京橋川、しおどめ汐留
 川の三筋があり、日本橋川と京橋川を横につな繋いでいるものにかえで楓川、
 亀島川、箱崎川があることから、京橋川と汐留川を繋いでいるも
 のに、また、三十間堀川と築地川があることをすらすら語つた。
 私も、全然、知らないこともなかつたが、こういう堀割にそう
 一々河名のついていることは、それ等の堀割を新しく見みあらた更める
 ような気がした。

「どうぞ、もつと教えて頂ちようだい戴」と私は云つた。

すると、娘ははじめて自分の知識が真味しんみに私を悦よろこばせるらしい
 のに、張合いを感じたらしく、口を継いで語つた。

「隅田川から芝浜へかけて昔から流れ込んでいた川は、こちらの西側ばかりを上流から申しますと、忍川、神田川、それから古川、これ三本だけでございました」

私は両国橋際で隅田川に入り、その小河口にあの瀟洒しょうしゃとした柳橋の架っている神田川も知っていれば、あの渋谷から広尾を通って新開町の家並けやきと櫂ながの茂みを流れに映し乍ら、芝浜で海に入る古川も知っている。だが、忍川というのは知らなかった。

「あの上野の三枚橋の傍に、忍川という料理屋がありました、あの近所にそんな名の川がありましたの、気がつきませんでしたわ」

「川にも運命があると見えまして、あの忍川などは可哀かわいそう想な川

でございます。あなたさまは、王子の滝ノ川をご存じでいらつしやいましょう」

むかし石神井川しやくじいといったその川は、今のように荒川平野へ流れて、荒川へ落ちずに、飛鳥山、道灌山、上野台の丘陵の西側を通つて、海の入江に入った。その時には茫洋ぼうようとした大河であつた。やがて石神井川が飛鳥山あすかと王子台との間に活路ひらを拓いて落ちるようになつて、不忍池しのばずのいけの上は藍染川あいぞめの細い流れとなり、不忍池の下は暗渠あんきよにされてしまつて、永遠に河身を人の目に触れることは出来なくなつた。

「大昔、この川の優勢だつたことは、あの本郷駒込台こまごめだいとこちらの上野谷中台やなかだいとの間はこの川の作つた谷合いだと申します。調

べると両丘にはその川の断谷層がいまだにごさいます」

私の蕩々^{とうとう}としている気分の中にも、この娘の語ることも

はや単純な下町娘の言葉ではなく、この種の智識にかけては一通り築きかけたもののあるのを見て取った。慎^{つつま}しく語ろうと気をつけている言葉の端々に関東ローム層とか、第三紀層とかいう専門語が女学校程度の智識でない口慣れた滑らかさでうっかり洩^もれ出すのを、私の注意^{とら}が捉え^{とら}ずにはいなかった。

「とてもそういうお話にお詳しいのね。どうしてあなたが、こう申しちや何ですけれど、下町のお嬢さんのあなたが、そういう勉強をなさったのですか、素人にしちやあんまりお詳しい……」

娘は、

「河岸に育ったものですから、東京の河に興味を持ちまして……それに女子大学に居りますうち、別にこういうことに興味を持つ友達と研究も致しましたが……」と俯向うつむいて云うと、そこで口を噤つぶんだ。

「たった、それだけで、こんなにお詳しい？」

私は、娘の言訳が何かわざとらしいのを感じた。何かもつと事情ありげにも思ったが、私はまたしてもこの家の人事に巻き込まれる危険を感じたので、無理に気を引締めて、もつと追求したい気持ちは様子に現わさなかった。

こうして親しげに話していて、隣に座っている娘と、何か紙一重へだ距はてたような、妙な心の触れ合いのまま、食後の馥郁ふくいくとした

香煎こうせんの湯を飲み終えると、そこへ老主人が再び出て来て挨拶あいさつした。茶の湯の作法は私たちを庭へ移した。蔵の中の南洋風の作り庭の小亭で私達は一休みした。

私は手持不沙汰てもちぶさたを紛らすための意味だけに、その棕櫚しゆろの葉かげに咲いている熱帯生の蔓草つるくさの花を覗のぞいて指して見せたりした。

娘は微笑し乍ら会釈して、その花に何か暗示でもあるらしく、煙ひとみつて濃い瞳ひとみを研ぎ澄し、じーっと見入った。豊かな肉付き加減で、しかも暢のび暢のびしている下肢を慎ましく膝ひざで詰めて腰をかけ、少し低目に締めた厚板帯の帯上げの結び目から咽喉のどもとまで大輪の花の蒼つばみのような張つてはいるが、無垢むくで、それ故に多少寂しい胸が下町風の伊達だてな襟の合せ方をしていた。座板へ置いて無意識

にポーズを取る左の支え手から素直に擡もたげている首へかけて音律的の線が立ち騰のぼつては消え、また立ち騰もたつているように感じられる。悠揚と引かれた眉まゆに左の上鬢うわびんから搔かき出した洋髪の波の先が掛り、いかにも適確で聡明そうめいに娘を見せている。

私は女ながらつくづくこの娘に見惚みほれた。棕櫚の葉かげの南洋蔓草の花を見詰めて、ひそかに息を籠こめるような娘の全体は、新様式な情熱の姿とでも云おうか。この娘は、何かしきりに心に思いひ屈かんでいる——と私は娘に対する私の心理の働き方がだんだん複雑になるのを感じた。私はいくらか胸が弾むようなのを紛まらすために、庭の天井を見上げた。硝子ガラスは湯気で曇かすっているが、飛白かすり目にその曇かすりを撥はいては消え、また撥はく微点みぞれを認めた。雲みぞれが降ふつ

ているのだ。娘も私の素振りに気がついて、私と同じように天てんじ
井硝子ようガラスを見上げた。

合図があつて、私たちは再び茶室へ入つて行つた。床の間の掛軸は變つていて、明治末期に早世した美術院の天才画家、今村いまむら紫紅しこうの南洋の景色の横ものが掛けられてあつた。

老主人の濃茶の手前があつて、私と娘は一つ茶碗ちやわんを手から手に享うけて飲み分つた。

娘の姿態は姉に対する妹のようにしおらしくなつていた。老主人の茶の湯の技ぎ倆りょうは少しけばけばしいが確であつた。

作法が終ると、老主人は袴はかまを除とつて、厚い綿入羽織を着て現われた。炉に嚙かじりつくように蹲かがみ、私たちにも近寄ることを勧めた。

そして問わず語りにこんな話を始めた。

徳川三代將軍の頃、関西から来て、江戸廻船かいせんの業を始めたものが四五軒あつた。

その船は舷側げんそくに菱形ひしがたの棧はを嵌めた船板を使ったので、菱垣船きぎねと云つた。廻船業は繁昌はんじようするので、その廻船によつて

商いする問屋はだんだん殖え、大阪で二十四組、江戸で十組にもなつた。享保時分、酒樽なは別に船積みするといふ理由の下に、新運送業が起つた。それに倣ならつて、他の貨物も専門専門に積む組織が起つた。すべて樽廻船たるかいせんと云つた。樽廻船は船も新型で、運賃やすも安くしたので、菱垣船は大打撃を蒙こうむつた。話のうちにも老主人は時々神経痛しんけいとうを宥ゆるめるらしい妙な臭いの巻煙草まきたばこを喫すつた。

「寛永時分からあつた菱垣廻船の船問屋で残つたものは、手前ども堺屋と、もう二三軒、郡こおりや屋と毛馬屋けまやというのがございましたのですが……」

しかし、幕末まえ頃まで判つていたその二軒も、何か他の職業と變つたとやらで、堺屋は諸国雜貨販売と為替かわせり両替りようがえを職としていた。

それから話はずっと飛んで、前の話とはまるで関係がないものを、強いてあるような話ぶりで、老主人は語り継いだ。

「河岸の事務室を開けて、貸室に致しましたのも窮余の策で、実は、この娘に結婚させようという若い店員がございますのですが、どうも、その男の氣心がよく見定まりません。いろいろ迷つた場

句、どなたか世間の広い男の方にも入って頂いて、そういう方々ともお付合ひして見て、改めて娘の身の振り方を考え直してみましよう。まあ、打ち撒ければ、こういった考えがござりましたのです」

娘は俯向うつむいて、赧あかくなつた。

「なにせ、私どもの暮しの範囲と申したら、諸国の商売取引の相手か、この界隈かいわいの組合仲間くみあひで、筋が定まり切っているだけ、広いようであ外狭いのでございます。それにこの娘が一時どういふ気か学者になるなどと申して、洋服なぞ着て、ぱふらぱふらやつたものですから、いよいよ妙なことになつて、婿の口も思うほどのことはございませんでして……」

娘は殆ど裁きを受ける女のように、首を垂れて少し蒼ざめていた。私は、

「もう、よろしいじゃございませんか、お話しは、また、この次に……」

と云ったが、老父は、

「いや、そうじゃございません。手前は明日が明日からまた寝込んでしまつて、いつこの次にお目にかかれるか判りません。それで……」と意気込んで来た。老父には真剣に娘の身の上を想う電気のようなものが、迸り出した。

「私の知らない間に、娘がちよつろりと、あなたさまに部屋をお貸ししたと聞いて、実は私は、怒りました。しかし、娘はあなた

さまの御高名を存じて居り、お顔も新聞雑誌で存じ上げて、かねてお慕い申していたので、喜んでお貸ししたと申します。私も思ひ返してみれば、あなたさまが世間のことは何事も御承知の筆をお執りになる方である以上、却かえつて、何かの便宜にあずかれるかも知れない。それで娘にもよく申付けて、お仕事にはお妨げにならないよう、表の事務室は人に貸すことは止めて仕舞い、また、是非、お近付き願えるよう、気を配って居りました。どうぞ、これから、これを妹とも思おぼしめ召し下すつて、叱しかつても頂き、お引立てもお願いいたし度たいのです。どうぞお願い申します」

老父は右手の葉煙草くすりたばこをぶるぶるふる慄ふるわして、左の手に移し、煙草盆に差込むと、開いた右の手で何処へ向けてとも判らず、拝む

ような手つきをした。それは素早く軽い手つきであつたが、私を
ぎよつとさせた。娘も、それにつれて、萎れたままお叩頭した。

老父のそこまでの話の持つて来方には、衰えてはいるようでも、
下町の旧舗しにせの商人の駆け引きに慣れた婉えんきよく曲まがな粘りと、相手の
気の弱い部分につけ込む機敏さがしたたかに感じられた。

私は娘に対して底ではかなり動いて来た共感の気持ちも、老父
の押しつけがましい意力はんぱつに反撥はんぱつさせられて、何か嫌あな思いが
胸むねに湧いた。しかし、

「まあ、私に出来ますことは……」と、かすかな声で返事しなけ
ればならなかつた。

電気行灯でんきあんどんの灯の下に、竈河岸へつついがしの笹巻すしの鮓すしが持出された。老

父は一札して引込んで行つた。首の向きも直さず、濃く煙らして、
炬炭の火を見詰めていた娘の瞳ひとみと睫毛まつげとが、黒耀石こくようせきのように結
晶すると、そこからしとりしとりしずく雫が垂れた。客の私が、却つて
浮寝鳥に枯柳の腰模様の着物の小皺こじわもない娘の膝ひざの上にハンケチ
を宛あてがい、それから、鮎あしを小皿に取分けて、笹の葉を剥むいてや
らねばならなかつた。

でも、娘は素直に鮎あしを手を受取ると、一口端かを嚙かんだが、また
しばらく手首に涙の雫を垂し、深い息を吐いたのち、

「あたくし、辛い！」と云つた。そして私の方へ顔を斜に向けた。

「あたくしは、ときどきいつそのこと芸妓げいぎにでも、女給にょぎにでもな
つて、思い切り世の中に暴れてみようと思ふことがありますの」

それから、口の中の少しの飯粒も苦いもののように、懐紙を取出して吐き出した。

私は、この娘がそういうものになって暴れるときの壯觀をちよつと想像したが、それも一瞬ひらめいて消えた火のような痛快味にしか過ぎないことを想い、さしずめ、「まあそんなに思い詰めないでも、辛抱しているうちには、何とか道は拓^{ひら}けて来ますよ」と云わないではいられなかった。

昨夜から今朝にかけて雪になっていた。私は炬燵^{こたつ}に入って、叔母に向つて駄々を捏^こねていた。

「あすこの家へ行くと、すっかり分別臭い年寄りにされて仕舞うから……」

「だから、なおのこと行きなさいよ。面白いじゃないか、そういう家の内情なんて、小説なんかには持つて来いじゃありませんか」
この叔母は、私の生家の直系では一粒種の私が、結婚を避け、文筆を執ることを散々嘆いた末、遂に私の意志の曲げ難いのを見取り、せめて文筆の道で、生家の名跡を遺のこさしたいと、私を策励しにかかっているのだった。

「叔母さんなんかには、私の気持ち判りません」

「あんたなんかには、世の中のこと判りません」

だが、こういう口争いは、しじゅうあることだし、そして、私

を溺愛^{できあい}する叔母であることを知ればこそ、苦笑しながらも、それを有難いと思つて、享^うけ入れている私との間には、いわば、睦^{むつ}まじさが平凡な眠りに墜^おちて行くのを、強いて揺り起すための清涼剤に使うものであったから、調子の弾むうちはなお二口三口、口争いを続けながら、私はやっぱり河沿いの家のことを考えていた。

結局あの娘のことを考えてやるのには、どうしても、海にいるという許^{いいなづけ}婚^けの男の気持ちを一度見定めてやらなければならなくなるのだろう。ここまで煩わされた以上、もう仕事のために河沿いの家を選んだことは無駄にしても、兎^とに角^{かく}、この擾^{みだ}された気持ち^{みだ}を澄ますまで、私はあの河沿いの家に取付いていなければな

らない。

河沿いの家で出来たことは、河沿いの家できれいに仕末して去り度い。

そう思つて来ると、口惜しさを晴らす意地のようなのが起つて来て、私は炬燵の布団から頬ほおを離して立ち上つた。

「河沿いの仕事部屋へ雪見に行くわ」

叔母は自分の意見を採用しながら、まだ、瘦やせがまん我慢に態のよいことを云つてると見て取り、得意の微笑を泛うかべながら、

「ええええ、雪見にでも、何でも好いから、いらつしやいとも」と云つて、いそいそと土産みやげものと車を用意して呉くれた。

昨日の礼に店先へ交魚の盤台を届けて、よろしくと云うと、居合せた店員が、

「お旦那おおだんなは昨夕からお臥ふせりで、それからお嬢さんもご病気で」と挨拶あいさつした。私は、「おや」と思いながら、さつさと自分の河沿いの室へ入った。

いつもの通り、やまが火鉢の火種を持って来た。

「お嬢さんお風邪……」と私は訊きいて見た。

やまは、「ええ、いえ、あの、ちよつとご病気でございます」と云つて、訊たずねられるのを好まぬように素早く去った。

何か様子が妙だとは思つたが、窓障子を開け放した河面を見て、

私はそんな懸念も忘れた。

雪はほとんど小降りになつたが、よく見ると鉛を張つたような都の曇り空と膠にかわを流したような堀河の間を爪つめで搔かき取つた程の雲母うららの片れが絶えず漂つている。眼の前にぐいと五大力の苦とまを茸ふいた舳へさきが見え、厚く積つた雪の両端から馬の首のように氷柱つららを下げている。少し離れて団平船だんべいぶねと、伝馬船てんません三艘そうとが井桁いげたに歩あび板を渡して、水上に高低の雪溪を慥うずくまえて蹲うずくまつている。水をひたひたと湛たたえた向河岸の石垣の際に、こんもりと雪の積もつた処々を引つ搔かいて木肌の出た筏いかだが乗り捨ててあり、乗手と見える蓑笠みのかさの人間が、稲荷いなりの垣根の近くで焚火をしている。稲荷の祠ほこらも垣根も雪に隈取くまどられ、ふだんの紅殻べんがらいろは、河岸の黒まつた倉庫に対

し、緋ひ緘おどしの鎧よろいが投な出だされたような、鮮あざやかな一い堆ったいに見える。河川通のこの家の娘は、この亀島川は一日の通船数が三百以上もあり、泊り船は六十以上で、これを一町に割当てるとほぼ十艘ずつになると云つたが、今日はそういう河容とは、まるで違つたものに見える。

そして、私が心を奪われたのは、いよいよ、そういう現象的部分部分ではなかつた。ふだんの繁劇な都会の濠ほり川かわの人為的生せい活かつが、雪という天然の威力に押えつけられ、逼ひつそく塞すきました隙間から、ふだんは聞取れない人間の哀切あせぢやな囁ささやきがかすかに漏れるのを感じずるからであつた。そして、これは都会の人間から永えい劫ごうに直接具体的には聞き得ず、こういう偶々たまたまの場合、こういう自然現象の

際に於て、都会に住む人間の底に潜んだ嘆きの総意として、聴かれるのであつた。この意味に於て、眼の前見渡す雪は、私が曾て他所よその諸方で見たと違つて、やはり、東京の濠川ほりかわの雪景色であつた。

小店員が入つて来て、四五通の外文の電報や外文の手紙を見て呉れと差出した。

「まことに済みませんが、店の者みんな出払ちやいましたし大おおだ旦那んなにもお嬢さんにも寝込まれちやいましたので……」

大切な急ぎの用だと困るといふので私が見たその注文の電報や外文は南洋と云われる範圍の各地からだつた。その一つには、

板舟。
鯛箱たいばこ。

卸しおろ 庖ぼう 丁ちよう 大小。
 鱈たら 籠かご。

半台。河岸ておけ 手桶。

計りザル。油屋ムネカケ。

うちばり
 打鉤 大小。タンベイ。

あしなかぞうり ひつきり
 足中草履。引切。

ローマ字から判読するこれ等は、誰か爪哇ジャバで魚屋を始める人があつて、その道具を注文して来たのだった。

一礼して去る小店員に向つて、私は、

「こういう簡単なものもご覧になれないつて、お嬢さんどういふご病気なの」

というと、小店員はちよつと頭を搔かいたが、

「まあ、^{きうつしよう}氣鬱症とか申すのだそうでございませうかな。滅多にございませんが、一旦そうおなりになると一人であすこへ閉籠^もって、人と口を利くのを嫌がられます」

若^もしかして、昨日、茶席での談話が、娘を刺戟^{しげき}し過ぎて、娘は氣鬱症を起したのかも知れない。そう云えばだんだん娘の性情の不平均、不自然なところも知れて来かかっていたし、そういう揺り返しが、たまたま起るといふことも、今更、不思議に思われなくなっていた。私は小店員の去ったあと、また河の雪を眺めていた。

水は少し動きかけて、退き始めると見える。雪まだらな船が二三艘^{そう}通って、筏^{いかだし}師も筏へ下りて、^{ともづな}纜を解き出した。

やや風が吹き出して、河の天地は晒さらし木綿の滝津瀬のように、
はくらんだっか白瀾濁化し、ときどき硝子障子の一所へ向けて吹雪の塊りを
ガラスしようじ投げつける。同時に、形がない生きものが押すように、障子はが
 たがたと鳴る。だが、その生きものは、硝子板に戸惑つて別に入
 口を見付けるように、ひゆうひゆう唸うなつて、この建物の四方を馳は
 せ廻まわる。

ふと今しがた小店員が云つた氣鬱症の娘が、何処ひきこもに引籠つて
 いるのだらうと私は考え始めた。暫しばらくして娘が氣鬱症にかかると
 あすこに……と云つた小店員がその言葉と一緒に一ちよつとあおむ寸仰向き加
 減にした様子が、いかにも娘が、私の部屋の近くにでもいるよう
 な氣配を感じさせたのに気づくと、娘は私の頭の上の二階にいる

のではないかと、思わずしがみついていた小長火鉢から私は体を反らした。

一たい、この二階がおかしい。私がここへ来てから、もう一月半以上にもなるのに、階段を伝って、二室ある筈はずのそこへ出入りする人を見たことがない。階段を上り下りする人間は、大概顔見知りの店員たちで、それは確に、三階の寝泊りの大部屋へ通うものであつて、昼は店に行つていてそこには誰もいない。二階の表側の一室は、物置部屋に代つた空事務室の上だから、私の部屋からは知れないようなものの、少くとも河に面した方の二階の今一つの空部屋は私が半日ずつ住むこの部屋のすぐ頭の上だから、いかに床の層が厚くても、普通に人が住むならその気配いとは何か

判りそうなものだ。それがふだん、まるきり無人の気配いであった。ひよつとしたら、娘がきようはそつとその室に閉じ籠っているのではあるまいか。

それから、私は注意を二階に集めて、気を配ったが、雪は小止みとなり、風だけすさまじく、幽かすかな音も聴き取れなかった。定刻の時間になったので私は帰った。

あくる日は雪晴れの冴さえた日であった。昨日から何となく私の心にかかるものがあつて私は今までになく早朝に家を出て河岸の部屋へ来た。そしてやや改まった様子で机の前に座っていると、思いがけない顔をしてやまがはいって来た。私は早く来たことについて好い加減な云いわけを云つたのち天井を振り仰ぎなが乍らやま

に向つて、

「どなたかこの上のお部屋にいるの」と訊きいた。

やまは「はあ」と答えた。

私の心の底の方にあつた想像が、うっかり口に出た。

「お嬢さんでもいらつしやるのではないの」

すると、やまの返事は案外、無雑作に、

「はあ、昨日もお昼前からいらつしやいました」と云つた。

「どういふお部屋なの」

やまは「さあ」と云つたが、實際、室の中の事は知らないらしく、他の事で答えた。

「昨日の大雪で、あなたはお出にならないでしょうと、お嬢さん

は二階のお部屋へお入りになりました。晩方、お部屋から出ていらつした時、私がおあなたがおいでになつたのを申上げると、とても、落胆なすつていらつしやいました。時々お二階の部屋へお嬢さんはお入りになります、その時はどんな用事でもお部屋へ申上げに行つてはならないと仰おつしやいますので……」

私には判つた。それは娘の歎なげきの部屋ではあるまいか、しんも根こんも尽き果てて人前ばかりでなく自分自身に対しての、張気も装いも投げ捨てて、投げ捨てるものもなくなつた底から息を吸い上げて来ようとする、時折の娘の命の休息所なのではあるまいか。だが、ときどきにもせよ、そういう一室に閉じ籠うらやまれるのは羨むしろしい。寧ろ嫉ねたましい。自分のように一生という永い時間をかけて、

世間という広い広い部屋で、筆を小刀メスに心身を切りこま裂いて見せ、それで真実が届くやら、届かぬやら判りもしない、得体の知れない焦立たしいなやみの種を持つものは、割の悪い運命に生れついたものである。

「で、今朝お嬢さんは？」

と私が云うと、やまは俄にわかに思いついたように、

「ああそうでしたっけ、お嬢さんが今日あなたがいらしたら、お二階へおいで願うように申し上げて呉れと先程お部屋へ入るまえに仰いました」

やまはここまで云つて、また躊躇ちゆうちよするように、

「でも、お仕事お済ましになってからでないとお悪いから、それ

もよく伺つて、ご都合の好い時に……つて……」

私は一まずやまを店の方へ歸して、一人になつた。

河の水は濃い赤土色をして、その上を歩いて渡れそうだ。河に突き墜おとされた雪の塊が、船の間にしきりに流れて来る。それに陽がさすと窈ようげん幻な冰山にも見える。こんなものの中にも餌えさがあるのか、鳥が下り立つて、嘴くちばしで搔かき漁あさる。

鳥の足搔あしがきの雪の飛沫ひまつから小さな虹が輪になつて出滅する。太鼓の音が殷いんいん々と轟とどろく。向う岸の稲荷いなりの物音である。

私は一人になつて火鉢に手をかざしながら、その殷々の音を聞いていると、妙にひしひしと寂しさが身に迫つた。娘の憂愁が私にも移つたように、物憂く、氣怠けだるい。そしていつ爆発するか知

れない焦々したものがあつて、心を一つに集中させない。私は時を置いて三四度、部屋の中を爪立ち歩きをして廻つて見たが、どうにもならない。やまは娘が、私の仕事時間を済ましてから来て欲しいと言伝てたが、いつそ、今、直ぐ独断に娘を二階の部屋へ訪ねてみよう——

二階の娘の部屋の扉をノックすると、私の想像していたとはまるで違つて見える娘の顔が覗いて、私を素早く部屋の中へ入れた。私の不安で好奇に弾んだ眼に、直ぐ室内の様子のはつきり映らない、爪哇更紗ジャバさらのカーテンが扉の開閉の際に覗かれる空間を、三四尺奥へ間取つて垂れ廻まわしてある。戸口とカーテンのこの狭い間で、娘と私はしばらく睨にらみ合いのように見合つて停つた。シャンデリ

ヤは点け放しにしてあるので、暗くはなかつた。

思いがけない情景のなかで突然、娘に逢つて周章てた私の視覚の加減か、娘の顔は急に瘦せて、その上、歪んで見えた。ウエーヴを弾ね除けた額は、円くぼこんと盛上つて、それから下は、大きな鼻を除いて、中窪みに見えた。顎が張り過ぎるように目立った。いつもの美しい眼と唇は、定まらぬ考えを反映するように、ぼやけて見えた。

娘は唇の右の上へ幼稚で意地の悪い皺をちよつと刻んだかと思えたが、ぼやけていたような眼からは、たちまちきりりとなつつかしそうな瞳が覗き出た。

「……………」

「……………」

感情が衝き上げて来て、その遣り場をしきりに私の胸に目げながら、腰の辺で空に藻搔もがかしている娘の両方の手首を私は握った。私は娘にこんな親しい動作をしかけたのは始めてである。

「何でも云つて下さい。関かまいません」

私のこの言葉と、もはや、泣きかかつて、おろおろ声でいう娘の次の言葉とが纏もつれた。

「あなたを頼りに思い出して、あたくしは……………却かえつて気の弱い……………女に戻りました」

そして、どうかこれを見て呉くれと云つて、始めて私をカーテンの内部へ連れ込んだ。

東の河面に向くバルコニーの硝子扉ガラスとびらから、陽が差込んで、まだつけたままのシャンデリヤの灯影ほかげをサフラン色に透き返させ、その光線が染色液体のように部屋中一ぱい漲り溢みなぎあふれている。床と云わず、四方の壁と云わず、あらゆる反物の布地の上に、染めと織りと繡ぬいいと箔はくと絵羽えばとの模様が、揺れ漂い、濤なみのように飛沫ひまつを散らして逆巻き亘わたっている。徒いたずらな豪奢ごうしやのうすら冷い触覚と、着物に対する甘美な魅惑とが引き浪のあとに残る潮の響鳴のよう
に、私の女ごころを衝うつ。

開かれた仕切りの扉から覗かれる表部屋の沢山の箆筒たんすや長持の新らしい木膚を斜に見るまでもなく、これ等のすべてが婚礼支度であることは判わかる。私はそれ等の布地を、転び倒れているものを

いたわ
労り起すように

「まあ、まあ」と云つて、取上げてみた。

生地は紋綸子もんりんずの黒地を、ほとんど黒地を覗かせないまで括りくく

染の雪の輪模様りんもように、竹のむら垣を置縫いにして、友禪と置縫いで大胆な紅梅立木を全面に花咲かしている。私はすぐ傍すくにどしりと投げ皺しわめられて七宝配しっぽうばいりの箔はくが盛り上っている帯を掬すくい上げながら、なお、お納戸色なんどいろの千羽鶴せんばづるの着物や、源氏あし手の着物にも気を散らされながら、着物と帯をつき合せて、

「どう、いいじゃないの……」と、まるで呉服屋の店先で品選りしなえするのように、何もかも忘れて眺めていた。

娘は、私から少し離れて停っていた。

「今日、あなたに見て頂こうと思ひまして、昨夜晩くまでかかつて展ひろげて置きましたのですけど……あたくし、こんなもの、何度、破り捨てて、新らしく身の固めを仕直そうと思つたか判りません。でも、やつぱり出来ないで……時々ここへ来ては未練がましく出したり取り散らしたりして見るのですけれど……」

明るみに出て、陽の光を真正面に受けると、今まで薄暗いところで見た娘の貌かおのくぼみやゆがみはすっかり均ならされ、いつもの爛らん漫とした大柄の娘の眼が涙を拭ふいたあとだけに、尚なお更さら、冴さえ冴さえとしてしおらしい。

「いつ頃、これを慥たしかえなさつて？」

「三年まえ……」

娘はしおしおと私に訴える眼つきをした。私は堪たまらなく娘がいじらしくなった。日はあかあかと照り出して、河の上は漸ようやく船の往来も繁しげくなった。

「あんまりこんな所に引込んでいると、なお気が腐りますからね。きようは、何処か外へ出て、気をさっぱりさせてから、本当にご相談しましょう」

河岸には二人並んで歩ける程、雪搔ゆきかきの開いた道が通り、人の往来は稀まれだった。

二歳のとき母に死に訣わかれてから、病身で昔ものの父一人に育て

られ、物心ついてからは海にばかりいる若い店員のつきとめられない心を追つて暮らす寂しさに堪え兼ねた娘は、ふと淡い恋に誘われた。

相手は学校へ行き来の江戸川べりを調査している土俗地理学者の若い紳士であつた。この学者は毎日のように、この沿岸に来て、旧神田川の流域の実地調査をしているのであつた。

河の源は大概複雑なものだが、その神田川も多くの諸流を合せていた。まず源は井頭池から出て杉並区を通り、中野区へ入るところで善福寺川を受け容れ、中野区淀橋区に入ると落合町でみょう妙正寺川と合する。それから淀橋区と豊島区と小石川区の堺の隅を掠めて、小石川区牛込区うしごめの境線を流れる江戸川となる。飯

田橋橋点で外濠そとぼりと合流して神田川となつてから、なお小石川から来る千川を加え、お茶の水の切り割りを通つて神田区に入り、両国橋の北詰で隅田川に注ぐまで、幾多の下町の堀川とも提携する。

東京の西北方から勢を起しながら、山の手の高台に阻まれ、北上し東行し、まるで反対の方へ押し遣やられるような迂曲うきよくの道を辿たどりながら、しかもその間に頼りない細流を引取り育はぐみ、強力な流れはそれを馴致じゆんちし、より強力で偉大な川には潔く没我合ぼつがごうじゆ鞅うして、南の海に入る初志を遂げる。

この神田川の苦勞の跡を調べることも哀れ深いが、もとの神田川は翹町台こうじまちだいの崖下がけしたに沿つて流れ、九段下から丸の内に入

つて日本橋川に通じ、芝浦の海に口を開いていた。この江戸築城以前の流域を調べることは何かと首都の地理学的歴史を訪ねるのに都合が良かった。例えば、単に下流の部分の調査だけでも、昔大利根が隅田川に落ちていた時代の河口の沖積^{ちゆうせき}作用を確めることが出来たし、その後、人工によつて河洲を埋立てて、下町を作つた、その境界も知れるわけであつた。この亀島町辺も三百年位前は海の浅瀬だつたのを、神田明神のある神田山の台を崩して、その土で埋めて慥えたものである。それより七八十年前は浅草なぞは今の佃島^{つくだじま}のように三角洲^{デルタ}だつた。

こういう智識もその若い学者から学ぶところが多かつたと、娘は真向から恋愛の叙情を語り兼ねて先ず^まこういう話から初めたの

であつた。

娘は目白の学校への往復に、その川べりのどこかの男の仕事場で度々出遇であい、始めはただ好感を寄せ合う目札から始まつて、だんだんその男と口を利き出すようになった。娘は、その男から先ず彼女に縁のある土地と卑近な興味の智識によつて、東京生れの娘が今まで気付かず^しにいたものの、その実はいかに東京の土と水に染みているかを学問的に解明された。

「明日は、おおまがり大曲の花屋の前の辺にいます。いらつしやい」

その若い学者は科学の中でも、過去へ過去へと現代から離れて行く歴史性に、現実的の精力を取籠とりこめられて行く人にありがちな、何となく世間に対しては臆おくびよう病ながであり乍ら、自己の好みに対し

ては一いつこく克な癩かんぺき癬びんのようなものを持っていた。それは純粹な坊ちやん育ちらしい感じも与えた。

「さあ、明日からはいよいよお茶の水の切り堀りに取りかかりましょう。学校へは少し廻りになるかも知れませんが、いらつしやい、いいでしょう」

この男が、いいでしょうというときは、既に決定的なものであって、おずおずとは云い出すのだが、云い出した以上、もう執拗しつこく主張して訊きき入れなかつた。

万治の頃、伊達家だてけが更に深く掘り下げて舟を通すようになったので、仙台堀とも云っている、この切堀の断崖だんがいは、東京の高台の地層を観察するのに都合がよかつた。第四紀新層の生成の順序

が、ロームや石や砂や粘土や砂礫されきの段々で面白いように判った。もうこの時分、娘は若い学者の測量器械の手入れや、採集袋の仕末や、ちよつとした記録は手伝えるようになっていた。

娘は学者の家へも出入りするようになっていた。富んだ華族の家で、一家は大家族だが、みな感じがよく、家の者も娘を好んだ。若い学者は兄弟中の末子で、特に両親に愛されているようだった。「お茶を飲みに行きませんか」「踊りに行きませんか」こういうこともある傍、娘は日本橋川を中心に、その界隈かいわいの堀割川の下調べを頼まれもした。

八ヶ月ほどかかった旧神田川の調査のうちに、娘は学校を卒業した。娘はその若い学者に結婚を申込まれた。

「いいでしょう、君」

やはり、おずおずと云い出すのだが、執拗しつこく主張した。娘むすめお

想もいの老父は、まことに良縁と思ひ、氣心の判らぬ海へ行つた若い店員との婚約は解消して是非その男に娘を嫁入らせると意氣込んだ。

海にいる若い店員からも同意の電報が来た。

小さいときから一緒に育つたけれども、青年期に入る頃から海に出はじめ、だんだん父娘おやこには性格が茫漠ぼうぼくとして来た若い店員には、今はもう強いて遠慮する必要は無い。娘の結婚を知らせるにも氣易かつた。若い学者との結婚の仕度は着々運んで行つた。

「川さかのぼを溯るときは、人間をだんだん孤独にして行きますが、川を

下って行くと、人間は連を欲し、複数を欲して来るものです」

若い学者は内心の弾む心をこういう言葉で娘に話した。娘も嫌ではなかった。

だが、ある夜遅くあの部屋へ入って、結婚衣裳いししょうを調べていて、ふと、上げ潮かもめに鷗の鳴く声を聴いたら、娘は芝居の幕が閉じたように、若い学者との結婚が馬鹿らしくなった。陸へ上つて来ない若い店員が心の底から恋われた。茫漠とした海の男への繋つなりをいかにもはつきりと娘は自分の心に感じた。

一時はひどく腹を立てても、結局、娘想いの父は、若い学者の家には、平謝りに謝って、結婚を思い切つて貰つた。若い学者はいくらか面当ての気味か、当時女優で名高かつた女と結婚して、

ときどき家庭はごたごたしている。

「じゃあ、その方には恋ではなくって、学問の好奇心で牽ひかれて行つたのね。道理で、あなた、河川の事に詳しいと思つた」

私は苦笑したが、この爛らん漫まんとした娘の性質に交つた好学的な肌合いを感じ、それがこの娘に対する私の敬愛のような気持ちにもなつた。

「あなた男なら学者にもなれる頭持つてるかも知れないのね」
娘は少し赫あかくなつた。

「……私の母が妙な母でした。漢文と俳句が好きで、それなのに常盤津ときわづの名取りでしたし、築地のサンマー英語学校の優等生でしたり……」

娘はその後のことを語り継いだ。その後、久し振りで、陸に上つて来た若い店員に思切つて訊いた。

「どうしたら、私はあなたに気に入るんでしよう」

男はしばらく考えていたが、

「どうか、あなたが今よりも女臭くならないように……。」

海の男は相変らず曖昧あいまいなことを云っているようで、その語調のなかには切実な希求が感じられたと娘は眼に涙さえうか泛べ、最上の力で意志を撓たわめ出すように云った。

「私のそれからの男おとこ優まさりのような事務的生活が始まりました。

その間二三度その男は帰って来ましたが、何とも云わずに酒を飲んで、また寂しそうに海へ帰って行きました。私はまだ、どこか

灰汁^{あく}抜けししない女臭いところがあるのかと、自分を顧みまして、
努めようとしましたが、もうわけが分りません。迷い続けながら、
それでも一生懸命に、その男の気に入るようにと生活して来ます
うち、あなたにお目にかかりました」

東京の中で、朝から食べさせる食物屋は至って数が少い。上野
の揚げ出しとか、日本橋室町の花村とか、昔から決っているうち
である。そうでなければ各停車場の食堂か、駅前はたごやの旅籠屋や魚市
場の界隈の小料理屋である。けれども女二人ではちよつと困る。
私たちは寒気の冴さえる朝かえでの楓川かえでに沿い、京橋川に沿って歩いたが、
そうそうは寒さに堪えられない。車を呼び止めて、娘をホテルの
食堂に連れて行き、早い昼飯を食べさせた。そのあと、ロージ

でお茶を飲みながら

「面倒臭いじゃありませんか、そんなこといつまでもぐずぐず云つてたつて……そんなこと云つて、その人が陸へ寄りつかないなら、こつちから私があなただを連れて、その人の寄る船つきへ尋ねて行き、のつぴきさせず、お話をつけようじゃありませんか」

私も東京生れで、いざとなると、無茶なところが出るのだが、それよりもこの得態の知れない男女関係の間に纏縛され、退ひくひ退ひかれず、切放れも出来ず、もう少し自棄やけ気味ぎみになつていた。

すべてが噎むせるようである。また漲みなぎるようである。ここで蒼穹あおぞら

は高い空間ではなく、色彩と密度と重量をもつて、すぐ皮膚に圧触して来る濃い液体である。叢林そうりんは大地を肉体として、そこから迸ほうしゅつ出する鮮血である。くれない極まつて緑りよくばん 礬ばんの輝きをひらめ閃かしている。物の表は永劫えいごうの真昼に白み亘り、物陰は常闇とこやみ世界せかいの烏羽玉うばたまいろを鏤ちりばめている。土は陽炎かげろうを立たさぬまでに熟燃あぶしている。空気は焙り、光線は刺す

私と娘は、いま新嘉坡シンガポールのラフルス・ホテルの食堂で昼食を摂り、すぐ床続きのヴェランダの籐椅子とういすから眺め渡すのであった。芝生の花壇で尾籠びろうなほど生なまの色の赤い花、黄の花、紺の花、赭の花が花卉を犬の口のように開いて、戯ざれ、噛かみ合っている。

「どう」私は娘に訊いた。

「二調子か三調子、気持ちの調子を引上げないと、とてもこの強い感じは受け切れないわ」と娘は眼を眩まぶしそうに云った。娘は旅に出てから、全く私に倚よりかかるようになっただけ、親しくぞんざいな口が利けるようになった。

私には、あまりに現実に乗出し過ぎた物のすべてが、却かえって感覚の度に引つかからないように、これ等の風物が何となく単調に感じられて眠気を誘われた。

「半音の入っていない自然というものは、眠いものね」

私は娘が頸くびを傾けて、も一度訊き返そうとするのを、別に了解して欲しいほどの事柄でもないのです、他の事を云った。

「兎とに角かく、熱いわね。こういう所で、ランデヴウする人も、さぞ

骨が折れるでしょうが、そのランデヴウを世話する人は、いよいよ並大抵じゃないわね」

私は^{からか}揶揄いながら、横を向き、ハンカチを額へ持つて行つて、^{にし}滲み出す汗を抑えた。

娘は^{しんみ}真身に嬉しさを感じずるらしく、ちよつと籐椅子を私の方へいざり寄せ、^{ひじ}肘で軽く私の^{わき}脇の下を衝いた。

私は娘の身の上を引受けてから、若い店員と話をつける手段を進めた。丁度ボルネオの沿岸を航行していた船の若い店員に手紙と電報で事情の経緯を簡単に述べ、あらためて、私が仲に立つ旨を云い遣ると、^や店員からは^{シヤム}案外喜んだ承諾の返事が来て、^{ただし}但、いま船は^{ランリヤウインド}暹羅の塩魚を蘭領印度に運ぶために船をチャーターさ

れているから、船も帰せないし、自分も脱けられない。新嘉坡シンガポールなら都合出来る。見物がてら、ぜひそこへ来て貰い度いと、寧ろむし向うから懇請するような文意でもあつた。

私は娘にはああは約束したが、たかだか台湾の基隆キールンか、せめて香港ホンコン程度までであろうと予想していた。そこなら南洋行きの基点ではあり、双方好都合である。新嘉坡となると、ちよつと外遊するぐらいの心支度をしなければならぬ。

——少し当惑しているとき思ひの外力になつたのは叔母である。娘のとき藩侯夫人の女秘書のようなことをして、藩侯夫妻が歐洲の公使に赴任するとき伴われ、それから帰りには世界の国々をも廻まわつて来た女だけに、自分の畑へ水を引くように、私を励ました。

「あんたも一遍そのくらのところへ行つていらつしやい。すると世間も広くなつて、もつと私と話が合うようになりすから」

それから、女二人の旅券だの船だの信用状だのを、自分一人で掻き込むようにして罅を開け、神戸まで見送つて呉れた。

シンガポール邦字雑誌社の社長で、南洋貿易の調査所を主宰している中老人が、白の詰襟服つめえりふくにヘルメットを冠かぶつて迎えに来て呉れた。朝、船へは紋付の和服で出迎えて呉れたのであるが、そのときに較くらべて、いくらか精気を帯びて見えた。

「名物のライスカレーはいかがでしたか。とても辛くて内地の方

には食べられないでしょう」

私は昼の食堂で、カレー汁の外に、白飯に交ぜる添菜てんさいが十二三種もオードブル式に区分け皿に盛られているのを、盛装した馬來人マレイじんのボーイに差出されて、まず食慾が怯おびえてしまったことを語った。中老人は快げに笑つて、

「女の方は大概そう云いますね。だがあの中には日本の乾物のよ
うなものも混つていて、オツなものもありますよ。慣れて来ると、
そういう好みのものだけを選めば、結構食べられますよ」

こんなことから話を解ほし始めて、私たちは市中で昼食後の昼寝時間の過ぎるのを待った。

叔母はさすがに女二人だけの外地の初旅に神経を配つて、あら

ゆる手蔓てづるを手頼たのつて、この地の官民への紹介状を貰もらつて来て私に与えた。だが、私はそれ等を使わずに、ただ一人この中老人の社長を便宜に頼んだ。それは次のような理由で未知であった社長を既知の人であったかのようにも思おもつたからである。

私が少女時代、文学雑誌に紫苑という雅号で、しきりに詩を發表していた文人があつた。その詩はすこぶるセンチメンタルなものであつて、死を憧憬し、悲恋を慟どうこく哭する表現がいかに少女の情緒にも、誇張に感じられた。しかもその時代の日本の詩壇は、もはやそれらのセンチメンタリズムを脱し、賑にぎやかな官能を追い求めることに熱中した時代であつて、この主流に対比しては、いよいよ紫苑氏の詩風は古臭く索漠に見えた。それでも氏の詩作は

続けられていた。そのうち、ふと消えた。二三年してから僅わずかに三四篇また現われた。それは、「飛魚」とか「貿易風」とかいう題の種類のもので、いくらか詩風は時代向きになったかと感じられる程度のことか、却かえつて詩形をきごちなくしていた。詩に添えて紫苑氏が南の外洋へ旅に出た消息が書き加えられてあつた。しかし、その後に紫苑氏の詩は永久に見られなくなつた。

この新嘉坡邦字雑誌の社長が、当年の詩人紫苑氏の後身であつた。私は紫苑氏の後身の社長が、その携つている現職務上土地の智識に詳しかろうということも考えに入れたが、その前身時代の詩にどこか人の良いところが見えたのを憶おもい出し、この人ならば安心して、なにかと手引を頼めると思つた。

「ともかく、私が日本を出発するときの気概は大変なものでしたよ。しろかなきん白金巾の洋傘に、見よ大たいほう鵬の志を、となん図南の翼を、などと書きましてね。それを振り翳かざしたりなんかしましてね……今から思えば恥かしいようなもので、は、は、は、……」

そしてお茶の代りにビールを啜すすりながら、扇を使っていた中老の社長は感慨深そうに、海を見詰めていたが、

「人間の行き道というものは、自分で自分のことが判らんものですな。僕のその時分の初志は、どこか南洋の孤島を見付けて、理想的な詩の国を建設しようとしたにあつたのですが……だんだん現実に触れて見ると、まずその智識や準備をということになり、次には自分はもう出来ないから、それに似たような考えの人に、

折角貯えた自分の智識を与えようということになり、それが、職業化すると、単なる事務に化してしまいます」

中老年人は私達をじろじろ眺めて、

「普通の人にならこんな愚痴は云わないで、ただ磊落らいらくに笑っているだけですが、判つて下さりそうな内地の若い方を見ると、つい喋りしゃべりたくなるのです。あなた方のお年頃じゃ判りますまいが、人間は幾つになつても中学生のところは遺のこっています」

そして屹きつとなつて私の顔を見張り、自分が云い出す言葉が、どう私に感銘するかを用心しながら云つた。

「僕は、今でも、僕の雑誌の詩壇の選者を頑張つてやっています。だんだん投書も少くなるし、内地の現代向の人に代えろと始終、

へんしゅう
編輯

主任に攻撃されもしますが、なに、これだけは死ぬまで人にはやらせない積りです」

日盛りの中での日盛りになつたらしく、戸外の風物は灼熱しやくねつ極まつて白燼はくじんか化した灰色の焼野原に見える。時代をいつに所を何処と定めたらいいか判らない、天地が灼熱に溶けて、静寂極まつた自然が夢や幻になつたのではあるまいか。そこに強烈な色彩や匂においもある。けれどもそれは浮き離れて、現実の実体観に何の関りもない。ただ、左手海際なだれの林から雪崩れ込む若干の椰子やしの樹の切れ離れが、急に数少なく七八本になり三本になり、距へだてて一本になる。そして亭々とした華奢きやしやな幹の先の思いがけない葉の繁しげみを、女の額の截きり前髪のように振り捌さばいて、その影の部分だ

けの海の色を涼しいものにしてゐる。ここだけが抉り取られて、日本の景色を見慣れた私たちの感覚に現実感を与える。

天井に唸る電気扇の真下に居て、けむるような睫毛を瞳に冠せ、この娘特有の霞性をいよいよ全身に拡げ、悠長に女扇を使いながら社長のいうことを聴いている。私が手短に娘をここへ連れて来た事情を社長に話す間も、この娘はまるで他にそんな娘でもあるのかと思ひでもしてゐるような面白そうな顔をして聴いている。私は憎みを感じずるくらい、私に任せ切りの娘の態度に呆れながら、始めは娘をこの方と社長に云つていたのを、いつの間にか、この子という言葉に代えて仕舞つていた。

「どうも、近代的の愛というものは複雑ですな。もう、僕等の年

代の人間には、はつきりは触れられんが……」

旧詩人の社長は、よく通りかかりの旅客が、寄航したその場だけ、得手勝手なことを頼み、あとはそれなりになつてしまふ交際に慣れているので、私が娘を連れて、こちらに來た用向きを話し出すと、始めは氣のない顔つきをしていたが、だんだん乗り出して來た。

「その男なら時々調査所へ來て、話して行きますよ。淡白で快活な男ですがね」

社長はビールを啜つたり、ハンカチで鼻を擦こすつたりする動作を忙しくして、やや興奮の色を示し、

「へえ、あの男がこういう美しいお嬢さんとそういうことがある

んですか。それはロマンチックなお話ですね。よろしい、一つお手伝いしましょう」

中老の社長はその男にも好意を持つと同時に、自分も自分の奥に燃え燻くすぶってしまった青春の夢を他人ごとながら、再び繰り返せるように気が弾んで来たらしい。

「恋というものは人間を若くする。酒と子供は人間を老いさせる」ステツキの頭の握りに両手を載せ、その上に額の端を支えながら、こんな感慨めいた言葉を吐いた。大酒呑のみで子供の大勢あるという中老の社長は、籐とうのステツキをとんと床に一突きして立上ると

「その船の入港には、まだ三日ばかり日数がありますな。では、

その間にしつかり見物しときなさるがよろしいでしょう」

そしてボーイに車を命じた。

スピーディーな新嘉坡シンガポール見物が始まった。この市にも川が貫いて流れていた。私は社長に注文して、まず二つ三つその橋々を車で渡つて貰つた。

両岸は洋館や洋館擬いまがの支那家屋の建物が塀のように立ち並んでいるところが多く、ところどころに船が湊泊する船溜りボート・ケイが膨らんだように川幅を拡げひろている。そして、漫々と湛たえた水が、ゆるく蒼空あおぞらを映して下流の方へ移るともなく移つて行く。軽く浮

く芥屑ごみくずは流れの足が速く、沈み勝ちな汚物を周るめぐようにして追
い抜いていく。荒く組んだ筏いかだを操って行く馬來の子供。やはり都
の河おもかけの梯を備えている。

河口に近くなつてギヤヴァナー橋というのが、大して大きい橋
でもないが、兩岸にゲート型の柱を二本ずつ建て、それを絃げんの駒
にして、ハープの絃のように、陸の土と橋欄とに綱を張り渡して、
橋を吊つっている。何ともないような橋なのだが、しきりに私達の
心は牽ひかれる。向う岸の橋詰ガジマルに榕樹の茂みが青々として、それ
から白い尖塔せんとうが抽ぬんでている背景が、橋を薄肉彫のように浮き
出さすためであらうか。私がいつまでも車から降りて眺めている
と、娘はそれを察したように、

「東京の吾妻橋あずまばしとか柳橋とかに似てるからじゃありません？」と云った。

この橋から間もなく、河口の鵜うの喉のどの膨らみのようになっている岸に、三層楼の支那の倉庫店がずらりと並び、河には木履ぼくりがた型のジャンクが河身を埋めている。庭の小亭のようなものが、脚を水上にはだけてぬいぬい立っている。

「橋が好きなら、この橋のもう一つ上のさつき渡つて来た橋、あれをよく覚えときなさい。あの橋から南と北に大道路が走っていて、何かと基点になっています。もしはぐれて迷子になったら、あの橋詰に立っていないなさればよい、迎いにいきますよ」社長はこんな冗談を云った。

官庁街の素気なく白々しい建物の数々。支那街の異臭、雑沓ざつとう、商業街の殷賑いんしん、私たちはそれ等を車の窓から見た。ここまで来る航行の途中で、上海シャンハイと香港ホンコンの船繋りふながかの間に、西洋らしい都会の景色も、支那らしい町の様子もすで見えて来た。私たちはただ南洋らしい景色と人間とを待ち望んだ。しかし、道で道路工事をしている人々や、日除けひよ付きの牛車を曳ひいている人々が、どこの種族とも見受けられない、黒光りや赫あかぐろ黒い顔をして眼をけいけい炯々と光らせながら、半裸体で働いている。軀幹くかんは大きい、みな瘦やせて背中まで肋骨ろっこつが透けて見える。あわれに物凄ものすごい。またそれ等の人々の背を乗客席に並べて乗せた電車が市中を通ると、地獄車のように、異様に見えた。その電車は床の上に何本か

の柱があつて風通しの為めに周りの囲い板はなく僅わずかに天蓋てんがいのよ
うな屋根を冠かぶっているだけである。癒いやし難い寂しい気持ちだが、私
の心を占める。

「ここは新嘉坡の銀座、ハイ・ストリートといひます」

と社長にいわれて、二つ三つの店先に寄り衣裳いしやうの流行の様子
を見たり、月光石ムーンストーンの粒を手に拵すくつて、水のようにさらさら零こぼ
しながらも、それは単なる女の習性で、心は外に漠然としたこと
を考えていた。

「この娘を首尾好く、その男に娶そわすことが出来たとしても、そ
れで幸福であるといえるだろうか。」

けれども、そう思う一方にまた、私は無意識のうちに若者と娘

が暫く茲しばらここに新住宅でも持つであろうことを予想してしきりに社長に頼むのだった。

「ここに住宅地のようなものでもありますなら見物さして頂きたいのですが」

その晩、私たちをホテルまで送つて来た社長は帰り際に「そうだ、護謨園ゴムえんの生活を是非見て貰わなくちや、——一晩泊りの用意をしといて下さい」

と云つて更に、

「そりや、健康そのものですよ」

あくる朝、まず、社長がホテルに迎えに来て、揃そろってサロンで待っていると、大型の自動車が入って来た。操縦席から下りたヘルメットの若い紳士を、社長は護謨園の経営主だと紹介した。

「電話でよく判らなかつたが……」

と経営主は云つてから、次に、私たちに

「いらつしやい。鰐わにぐらいは見られます」

と気軽に云つた。

車は町を出て、ジョホール街道を疾駆して行つた。速力計の針が六十五哩マイルと七十哩の間をちらちらすると、車全体が唸うなる生きものになつて、広いアスファルトの道は面前に逆立ち、今まで眼にとまっていた榕樹の中の草葺くさぶきの家も、椰子林やしりんの中の足高の小屋

も、樹を切り倒している馬來人マレイじんの一群も、総て緑の奔流に取り込められ、その飛沫ひまつのように風が皮膚に痛い。大きな齒朶しだや密竹で装われている丘がいくつか車の前に現れ、後に弾んで飛んで行く。マークの付いている石油タンクが乱れた列をなして、その後
にじりじりと展転して行く。

「イギリス海軍用のタンク」

水が見える。綺麗きれいな可愛かわいらしい市が見える。ジヨホール海峡の陸橋を渡つて、見えていた市の中を通つて、なおしばらく水辺に沿つて行つた処で若い紳士は車を停とめ、土地の名所である回教の礼拝堂を見せた。がらんとした何もない石畳と絨氈じゅうたんの奥まつた薄闇うすやみへ、高い窓から射さし入る陽の光がステンドグラスの加減

で、虹ともつかず、花明りともつかない表象の世界を幻出させている。それを眺めていると、心が虚うつろになって、肉体が幻の彩りのままに染め上げられて仕舞いそうな危険をほとほと感ずる。私たちは新嘉坡の市中で、芭蕉の葉で入口を飾り、その上へ極端な性的の表象を翳かざしているヒンズー教の寺院を見た。それは精力的に手の込んだ建築であった。

虚空を頭とし、大地を五体とし、山や水は糞ふん尿にょうであり、風は呼吸であり、火はその体温であり、一切の生物無生物は彼の生むところと説く、シバ神崇拜に類して精力を愛するこの原始の宗教が、コーランを左手に剣を右手に、そして、ときどき七彩の幻に静慮する回教に、なぜ南方民族の寵ちようをば奪われたのであろうか。

そしてその回教がなぜまた物質文化におさ圧えられたのであろうか。

私は取り留めもない感想にとら捉われながら、娘を見ると、いよいよ不思議な娘に見える。娘はモデレートな夏の洋装をしているのだが、それは皮膚を覆う一重のものであつて、中身はこの回教の寺院の中に置けば、この雰囲気ふさに相応わしく、ヒンズー教の精神的な寺院の空気にも相応わしかつた。そればかりでなく、この地の活動写真館のアトラクションで見た暹羅シヤムのあのすばらしくさば捌きさばのいい踊りを眺めていた時の彼女に、私はその踊りを習わせて、名踊子にしたい欲望さえむらむらと起つたほど、それにも相応しいものがあつた。

一体この娘は無自性なのだろうか、それとも本然のものを自覚

「うん、やっとなるね」

と云った。

それは海峡の一部に出来るイギリス海軍根拠地の大工事だと、社長は説明した。

道が尽きてしまつて、そこから私たちはトロツコに乗せられた。箱車を押す半裸体の馬來人マレイじんは檳榔子びんろうじの実を噛かんでいて、血の色つばの唾つばをちゅつちゅと枕木に吐いた。護謨園ゴムえんの事務所に着いた。

事務所は椰子林やしりんの中を切り拓ひらいて建てた、草葺くさぶきのバンガロー風のもので、柱は脚立のように高く、床へは階段で上った。粘っ

て青臭い護謨の匂においが、何か揮発性の花の匂いに混つて来る。

壁虎やもりがきちきち鳴く、気味の悪い夜鳥の啼なき声、——夕食後私
はヴェランダの欄干らんかんに凭もたれた。私のいる位置のいびつに切り拓
かれた円味のある土地を椰子の林が黒く取巻いている。截きり立つ
たような梢こずえは葉を参差しんししていて、井戸の底にいるような位置の私
には、草葱くさしのぶの生えた井の口を遙かに覗のぞき上げている趣であつ
た。

その狭い井の口から広大に眺められる今宵こよいの空の、何と色濃あい
ことであろう。それを仰いでいると、情熱の藍壺あいつぼに面を浸し、
瑠璃色るりいろの接吻せつぶんで苦しく唇を閉じられているようである。夜を一
つの大きな眼とすれば、これはその見詰みつめる瞳ひとみである。気を取り

紛ら^{さん}す燦々たる星がなければ、永くはその凝澄^{こりすま}した注視に堪えないだろう。

燦々たる星は、もはやここではただの空の星ではない。一つずつ膚に谷の刻みを持ち、ハレーションを起しつつ、悠久に蒼海^{そうかい}を流れ行く冰山である。そのハレーションに薄肉色のもあるし、黄薔薇^{きばらいろ}色のもある。紫色が爆^はぜて雪白の光茫^{こうぼう}を生んでいるものもある。私は星に一々こんな意味深い色のあることを始めて見た。美しい以上のものを感じて、脊椎骨^{せきついこつ}の接目接目に寒気がするほどである。

空地の真中から、草葺きのバンガローが切り拓かれた四方へ大ランプの灯の光を投げている。

その光は巻き上げた支那簾しなすだれと共に、柱や簾に絡んでいる凌のうぜ霄んかざら花はなにやや強く当る。欄干の下に花壇もあるらしい。百合ゆりと山査子さんざしの匂いとだけ判つて、あとは私の嗅きゆう覚かくに慣れない、何の花とも判らない強い薬性の匂いが入れ混つて鬱うつぜん然ぜんと刺戟しげきする。私と社長は、その凌霄花の陰のベランダで、食後の涼をいつまでも入れている。娘は食後の洗物を手伝つて、それから蓄音機をかけて、若い事務員たちのダンスの相手をしてやっていたが、疲れた様子もなく、まだ興を逐おうこの僻地こわに仮住する青年たちのために、有り合せの毀れギターをどうやら調整して、低音で長唄ながうたの吾妻八景あずまはつけいかなにかを弾いて聞かしている。若い経営主もその仲間に入っている。

ここへ来てからの娘の様子は、また、私を驚かした。経営主の他、五六人居る邦人の事務員たちは、私たちの訪問を歓迎するのに、いろいろ心を配ったようだが、突然ではあり、男だけで馬来人を使つてする支度だけに、一向^{はか}捗どらず、私たちの着いたとき、まだ途惑つていた。それと見た娘は

「私もお手伝いさせて頂きますわ」

と云つたきり、私たちから離れて、すっかり事務所の男達の中に混り、野天風呂も沸せば、応接用の室を片付けて、私たち女二人のための寢室も作った。

「森はずれから野鷄と泥亀を見付けて来たんですが、どう料理したらご馳走ちそうになるか、へばつていましたら、お嬢さんが、すつか

り指図して教えて呉れたんで、とても上等料理が出来ました。これならラフルス・ホテルのメニューにだつてつけ出されまき」

事務員の一人は、晩餐ばんさんの食卓でこう云つた。なるほど、支那料理めいたもの、日本料理めいたもののほかに、容器は粗末だが、泥亀をタートルス・スープに作ったものや、野鶏をカレー入りのスチューにしたものは特に味がよかつた。

「わたくしだつて、こんな野生のものを扱うの始めてですわ。学校の割烹科かつぼうかでは、卒業生が馬來半島へ出張料理することを予想して、教えては呉れませんでしたもの」

娘は、また、こんなことを云つて、座を取り持った。主人側の男たちは鬨あいたいとして笑つた。

娘がこういう風に、一人で主人側との接衝を引受けて呉れるので私は助かった。

私は私が始めてあの河沿いの部屋を借りに行ったとき、茶絹のシャツを着、肉色の股引ももひきを穿はいて、店では店の若い者に交り、河では水揚げ帳を持つて、荷夫を指揮していた娘を想おもい出した。

そして、この捌さばけて男慣れのした様子は、あまりに易々としたところを見せているので、私はまたこれが娘の天成であつて、私が付合あひ、私がそれに巻込まれて、骨を折っている現在の事は、何だか私の感情の過剰から、余計なおせっかきをしているのではないかという、いまましいような反省に見舞われそうになつた。

事務員の青年たちは、鬢鬣として笑い、娘に満足させられてい

る様子でも、それ以上には出ないようであつた。たつた一人、ウイスキーに酔つた一人の青年が、言葉の響を娘にこすりつけるようにして、南洋特産と噂うわさのある媚薬びやくの話をしかけた。すると娘は、悪びれず聞き取つていて、それから例の濃い睫毛まつげを俯目ふしめにして云つた。

「ほんとにそういう物質的のもので、精神的のものが牽制けんせいできるものならば、私の関り合いにも一人飲ませたい人間があるんでございますわ」

その言葉は、真に自分の胸の底から出たものとも、相手の話手に逆襲するとも、どつちにも取れる、さらさらした間を流れた。

そこに寂しい虚白なものが、娘の美しさを一時飲み隠した。そ

れは、もはや二度と誰もこういう方面に触る話をしようとするものはなくなつたほど、周囲の人間に肉感的なもの、情慾的なものの触手を収しゅうれん斂せんさす作用を持つていた。それで、娘が再び眼を上げて華やかな顔色に戻つたとき、室内はただ明るく楽しいことが、事務的に撈取はかどつて行く宴座となつた。けれども、娘は座中の奉仕を決して、義務と感ずるような気色は少しも見せず、室内の空気に積極的に同化していた。

中老の詩人社長は、欄干の籐椅子とういすで、まだビールのコップを離さず、酔いに舌甜したなめずりをしていた。

「東北風を斜に受けながら、北流する海潮を乗り越えつつ、今や木下君の船は刻々馬來半島の島角に近づきつつあるのです。送る

のは水平線上の南十字星、迎えるのは久恋の佳人。いいですな。
木下君は今や人間のありとあらゆる幸福を、いや全人類の青春を
一人で背負って立っているようなものです」

彼はすっかり韻文の調子で云って、それから、彼の旧作の詩ら
しいものを、昔風の朗吟の仕方うたで謡った。

星の海に

船は乗り出でつ

魂たまほ惚るる夜や

……

……

親しき息は海に通い

ささやきは胸に通い

………

浪枕

社長は私が話した海の上の男と、娘との間の複雑した事情は都合よく忘れて仕舞い、二人の間の若い情緒的なものばかりを引抽ひきぬいて、或は空想して、それに潤色し、自分の老いの気分みづみづに固着するのを忘れ、現在の殻から一時でも逃れて瑞々みづみづしい昔の青春に戻ろうと努めているらしいその願いが如何にも本能的で切実なものであるのに私の心は動された。朗吟も旧式だが誇張的のまま素朴で嫌味はなかった。

親しき息は海に通い

ささやきは胸に通い——

壁虎やもりが鳴く、夜鳥が啼く。私にも何となく甘苦い哀愁が抽ひき出されて、ふとそれがいつか知らぬ間に海の上を渡っている若い店員にふらふらと寄って行きそうなのに気がつくつと、

「なにを馬鹿らしい。人の男のことなぞ」

と嘲あざけつて呆あきれるのであるが、なおその想おもいは果実の切口から滲み出す漿しやうえき液えきのように、激しくなくとも、直すぐには止まらないものであつた。

何がそうその男を苦しめて、陸の生活を避けさせ、海の上ばかり漂泊さすのか。

ひよつとしたら、他に秘密な女でもあつて、それに心が断ち切

れないのではあるまいか。

或は、この世の女には需^{もと}め得られないほどの女に対する慾求を、この世の女にかけているのではあるまいか。

或は、生れながら人生に憂愁を持つ、ハムレット型の人物の一人なのではあるまいか。

女のおよきものをまだ真に知らない男なのではあるまいか。

こういうことを考え廻^{めぐ}らしている間に、憐^{あわれ}な気持ち、嫉妬^{しつと}らしい気持ち、救^たつてやり度い気持ち、慰^なめてやりたい気持ち、詰^なつてやり度い気持ち、圧^{つか}し捉^{つか}まえてやり度い気持ちが、その男に對してふいふいと湧^わき出して来て、少し胸が苦しいくらいになる。恐らくこれは当事者の娘が考えたり、感じねばならないことだろう

にと、私は私の心の変態の働きに、極力用心しながら、室内の娘を見ると、いよいよ鮮かに何の屈托くつたくもない様子で、歌留多カルタの札を配っている。私はふと気がついて、

「あの女は、自分の愛の悩みをさえ、奴隷に代ってさせるといふ世にも珍らしいサルタンのような性質を持っている女なのではあるまいか。」

そして、それを知らないで、みすみすその精神的労苦を引受けた自分こそ、よい笑われものである。急に娘に対する憎みが起つた。だが、また娘の顔を覗のぞくと、あんまり鮮かで屈托がなさ過ぎる。私の反感も直ぐに消えてしまう。

「この無邪気さには、とても敵かなわない」

私は氣力も脱けて、今度はしきりに朗吟の陶酔に耽つている、社長の肩を揺つて、正氣に還らせ、

「これは真面目なご相談ですが……」と、木下の新嘉坡に於ける女出入や、その他の素行に就いて、私はまるで私立探偵のよう
に訊き質すのであつた。

深林の夜は明け放れ、銀色の朝の肌が鏡に吐きかけた息の曇りを除くように、徐々に地霧の中から光り出して来た。

一本のマングローブの下で、果ものを主食の朝餐が進行した。レモンの汁をかけたパイヤの果肉は、乳の香がやや酸味した孩児の頬に触れるような、かさ匂があつた。指ほどの長さでまるまると肥っている、野生のバナナは皮を剥くと、見る見

る象牙色そうげいろの肌から涙のような露を垂らした。柿の型をした紫の殻を裂くと、綿の花のような房が甘酸く唇に触れるマンゴスチンも珍らしかった。

「ドリアンがあると、こつちへいらつした紀念に食べた果ものになるのですがね。生憎あいにくと今は季節の間になつていたので……。

僕等には妙な匂いで、それほどとも思いませんが、土人たちは所い謂わゆる、女房を質に置いても喰くうという、何か蠱惑こわくてき的なものがあるんですね」若い経営主は云つた。

「南洋の果ものには、ドリアンばかりでなく、何か果もの以上に蠱惑的なものがあるらしいです。ご婦人方の前で、そう云つちや何ですが、僕等だとして独身でこんなところへ来て、いろいろの煩惱

も起ります。けれどもそういうものの起ったとき、無暗にこれ等の豊饒ほうじょうな果ものにかぶりつくのです。暴戾ぼうれいにかぶりつくのです。すると、いつの間にか慰められています。だから手元に果物は絶やさないのです」

若い経営主は紫色の花だけ眼のように涼しく開けて、葉はまだ閉じて眠っているポインシヤナの叢くさむらを靴の底でいじらしそうに※さすりながら、こう云った。

娘は、今朝も事務員に混っているいろ手伝っていたが、何となくそわそわしていた。そして、話にばつを合せるように、私には嫌味に思える程、きらきらした作り笑いの声を挙げた。しかし、若い経営主が、こういうにつれ、他の若い男たちも悵ちようぜん然とし

た様子を見て、娘は心から同情する気持ちで顔を現した。

「僕の慰めは酒と子供だな」と社長は云った。

彼は今朝もビールを飲んでいた。

「君にもまだ慰めなくちやならない煩惱があるのかね」と若い経営主は云った。「そんなにチツテ族のしゅうちよう酋長のような南洋色になつても」

社長は、「ある——大いにある」と怒鳴つたが、誰も酔いの上の気焰きえんと思つて相手にしない。社長は口を噤つぶんで仕舞つた。

逆巻く濤なみのように、梢こずえや枝葉を空に振り乱して荒れ狂っている

原始林の中を整頓せいとんして、護謨ゴムの植林がある。青臭い厚ぼつたいゴムの匂いがする。白紫色に華やぎ始めた朝の光線が当つて、閃ひらめく樹皮は螺線状らせんじょうの溝に傷けられ、溝の終りの口は小壺こつぼを銜くわえて樹液を落している。揃つて育兒院の子供等が、朝の含嗽うがいをさせられてゐるようでもある。馬來人マレイじんや支那人が働いている。

「僕等は正規の計劃けいかくの外、郷愁が起る毎に、この土に護謨の苗木を、特に一列一列植えるのです。妄念を深く土中に埋めるのです」

その苗木の列には、或は銀座通とか、日比谷とか、或は植主の生地でもあろうか、福岡県——郡——村とか書いた建札がしてあった。

若い経営主は、努めて何気なくいうのだが、娘は堪たまらなそうに、涙をぼたぼたと零こぼして、急いでハンケチを出した。

中老の社長は、こういう普通の感傷を珍らしいように眺め、私に云った。

「どうです。あなた方も、紀念に一本ずつ植えて行つては」

護謨園の中を通っている水渠すいきよから丸木船を出して、一つの川へ出た。ジョホール河の支流の一つだという。大きな齒しだ朶だとか蔓つ草くさで暗い洞陰を作っている河岸から、少し岐わかれて、流れの中に

岩石がある。

「あすこによく鰐わにの奴が、背中を干しているのだが、……」と事務員の一人が指したが、そのすぐあと、艦ともの方にいた事務員がい

った。

「こつちこつち、あすこにいます」

濁った流れの中に、黒っぽいものが、渦を水に曳ひいて動くのが見えた。また、その周囲にそれも生きものが泳ぐのかと思われるほどの微かすかな小さい渦が見える。

「は は は 子供を連れとる」

私の気持ちはというと、この原始の自然があまりに、私たちの自然と感じ慣れているものより差違があり、この現実が却かえつて、百貨店の催しものの、造り庭のように見え、この南洋風景図の背景の前に、鰐わにがいるのは当然の趣向に見え、もう少し脅おびえたい気持ちさえ自分に促した。鰐に向ける銃声の方が本当の鰐に対す

るより却って私たちを驚かした。鰐は影を没した。

「鉄砲の音は痛快ね」と娘はいつて、しきりに当もなく発砲して貰った。

「あなた方内地の女性に向つて、ふだん考え溜めていたことを、話し出せそうな緒いとぐち口が見つかったようになって、お訣わかれするのは惜しいものです」と若い経営主はいつた。

私も、「こういう本当の自然と、それを切り拓ひらいて行く人間の仕事に就ついて、漸ようやく眼が開きかかつて来たのに、お訣わかれするのは、まったく惜しい気が致します」といつた。

娘は俯うつむ向いて、型のうちにちよつと無くすり名指ゆびの背の節で眼を押えた。その仕草が、日本女性のこういう場合にとる普通の型のよ

うに見え乍ながら私はやはりこの遠方の異境にまで男を尋ねて来た娘が何かと感傷的になつてゐる証拠にも見た。

私たちはジョホール河のベンゲラン岬から、馬來人マレイじんが舵かじを執り、乗客も土人ばかりのあやしいまで老朽した発動機船に乗つた。

「腰かけたまわりには、さつき上げといた蚤取粉のみとりこを撒まくんですよ。そうしないと虫に食われますよ」見送りの事務員の労いたわつた声が棧橋から響いた。娘はポケットを押えてみて、窓からお叩頭じぎをした。

怠惰なエンジンの音が聞えて、機船は河心へ出た。河と云いながら、大幅な両岸は遠く水平線に退いて、照りつける陽の下に林

影だけ一抹の金の塗粉のようになって見えた。それが水天一枚の瑠璃色るりいろの面でしばしば断ち切れて、だんだん淡く、蜃気楼しんきろうの島のように中空に映り霞かすんで行く。たゆげな翼を伸した鳥が、水に落ちようとしてたゆたっている。

昼前に新嘉坡シンガポールの郊外のカトン岬の小さな栈橋についた。娘の待つ男の船は、今夜か明朝、新港に着く予定であつた。

「まだ時間は大丈夫だ。ゆっくりして行きましょう。この辺もチヤンギーと云つて、新嘉坡の名所の一つで、どうせ来なくちやならんところだ」社長はそういつて、海の浅瀬に差し出してある清涼亭という草葺くさいぶき屋根の日本人経営の料亭へ、私たちを連れて行き、すぐ上衣を脱いだ。

「まあいい所ね」

私も娘も悦よろこんだ。この辺の砂は眩まぶしいくらい白く、椰子やしの密林の列端すそは裾はしよを端折はしよつたように海の中に入っている。

亭たけがきの前の崖がけした下は生洲いけすになっていて、竹笠たけがさを冠かぶつた邦人の客が五六人釣つりをしている。

汐時のすこし湿しつぽい畳畳の小座敷で、社長は無事見学祝祝いだとか、何とか云いつては日本酒の盃盃を挙あげている。海うみの匂においと酒の匂においが、自分たちの遠い旅をほのぼのと懐なつかかします。私は生洲いけすから上げたばかりという生け鱸すずきの吸すものの椀わんを取上げて、長汀ちやうていき曲浦よくほにひたひたと水量すいりょうを寄せながら、浜の椰子林やしりんをそのまま投な影かげさせて、よろけ縞しまのように揺ゆらめかし、その遙とほかの末すえに新嘉坡

の白亜の塔と高樓と煤煙ばいえんを望ましている海の景色に眼を慰めていた。だが、心はまだしきりに今朝ジョホール河の枝川の一つで、銃声に驚いて見張った私達の瞳孔どうこうに映った原始林の巖かさおごそと純粹さを想おもい起していた。それはひどく心を直接に衝うつた。何か人間にその因習生活を邪魔なものに思わせ、それを脱ぎ捨て度たい切ない気持ちにさせた。そしてその原始の自然に食い込んで生活を立てて行く仕事しごとが、何の種類であれ、人間の生きる姿の単一に近いものであるように考えさせられた。始終自然から享うける直接の豊饒ほうじょうな直観ちくかんに浸れましょう。

「二万円の護謨園ゴムえんをお買いになれば、年々その収益で、こつちへ休暇旅行ができますね。どうです」

座興的であつたが若い経営園主がゆうべ護謨園で話の序にこう
いうことを云つたのも想い出された。

私の肉体は盛り出した暑さに茹るにつれ、心はひたすら、あの
うねる樹幹の鬱蒼うっそうの下に粗い菌朶しだの清涼な葉が針立っている幻
影に浸り入っていた。

そのとき娘が「あらっ！」と云つて、腕を下に置いた。そして、
「まあ、木下さんが」と云つて眼を瞠みはつて膝ひざを立てた。

小座敷から斜に距へだてて、木柵の内側の床を四角に切り抜いて、
そこにも小さな生洲がある。遊客の慰みに釣りをすることも出来
るようになってゐる。

いま、その釣堀から離れて、家屋の方へ近寄つて来る、釣竿を

手にした若い逞ましい男が、娘の瞳の対象になっている。白いノ
ーネクタイのシャツを着て、パナマ帽を冠ったその男も気がつい
たらしく、そのがっしりした顔にやや苦み走った微笑を泛べなが
ら、寛るやかに足を運んで来た。男は座敷の椽で靴を脱いだ。

「これはこれは、船が早く着いたのかい」

社長もびつくりして少し乗出して云った。

「けさ方早く着いちやつてね。早速、ホテルと君の事務所へ電話
をかけてみたが、出ているというので、退屈凌ぎにここへ昼寝
する積りで来てたんだが……」ひよつとするとここへ廻るかも知
れないとも思った。なにしろ新嘉坡へ来る内地の客の見物場所は
きまつているからと云つて男は朗に笑った。

私は男がこの座敷へ近寄つて来る僅わずか分秒の間に、男の方はちらりと一目見ただけで、娘の態度に眼が離せなかつた。

彼女は男が、娘や私たちを認めて、歩を運び出した刹那せつなに、

「あたし——」といつて、かなりあらわに体を慄ふるわして、私の肩つかまに掴つかつた。その掴り方は、彼女の指先が私の肩の肉に食い込んで痛いくらいだった。ふだん長い睫毛まつげをかむつて煙けむりっている彼女の眼は、切れ目一ぱいに裂け拡ひろがり、白眼の中央に取り残された瞳は、異常なシヨックで凝こつたまま、ぴりぴり顫せんどう動どうしていた。口も眼のように豎たてに開あいていた。小鼻も喘あえいで膨ふらみ、濃い眉まゆと眉の間の肉を冠かぶる皮膚が、しきりに隆たかまり歪ゆがめられ、彼女に堪え切れないほどの感情が、心内に相衝撃するもののように見えた。二

三度、陣痛のよううねりの慄えが強く、彼女の指先から私の肩の肉に噛み込まれ、同時に、彼女から放射する電気のようなものを私は感じた。私は彼女が気が狂ったのではないかと、怖れながら肩の痛さに堪えて、彼女の気色を覗つた。自分でも気がつくくらい、私の唇も慄えていた。

男は席につくと、私に簡単に挨拶した。

「木下です。今度は思いがけないご厄介をかけまして」と頭を下げた。

それから社長に向って

「いや、あなたにもどうも……」これは微笑しながらいった。

娘は座席に坐り直して、ちよつとハンケチで眼を押えたが、も

うそのときは何となく笑っている。始めて男は娘に口を切った。

「どうかしましたか」それは決して惨むじいとか冷淡とかいう声の響
ではなかった。

「いいえ、あたし、あんまり突然なのでびっくりしたものだから
……」そして私の方を振り向いて、「でも、すべて、こちらが
て下さるものですから」と自分の照れかくしを仕しな乍ら私に愛想を
した。

娘は直じきに悪びれずに男の顔をなつかしそうにまともに見はじ
めた。だが何気ないその笑い顔の頬ほにしきりに涙が溢あふれ出す。娘
はそれをハンケチで拭ぬぐい拭ぬぐい男の顔に目を離さない——男もいじ
らしそうに、娘の眼を柔かく見返していた。

社長もすべての疎通を快く感ずるらしく、

「これで顔が揃そろった。まあ祝盃として一つ」などとはしやいだ。

私はふと気がつく、娘と男から離れて、独り取り残された気持ちがあった。こちらから望んで世話に乗り出したくらいだから、利用されたというような悪毒あくどく僻ひがんだ気持ちはしないまでも、ただわけもなく寂しい感じが沁しみ々しみと襲った。——この美しい娘はもう私に頼る必要はなくなった。——しかし、私はどんな感情が起つて不意に私を妨げるにしても自分の引受けた若い二人に対する仕事だけは撈取はかどらせなくてはならないのである。私は男に、

「それで、結婚のお話は」

ともう判り切つて仕舞つたことを形式的に切り出した。すると

男はちよつとお叩頭^{じぎ}して、

「いや、私の考がきまりさえしたら、それでよろしいんでございましょう。いろいろお世話をかけて申訳ありません」といった。

娘は私に向つて、同じく頭を下げて済まないような顔をした。

もはや、完全に私は私の役目を果した。二人の間に私の差挟まる余地も必要もないのをはつきり自覚した。すると私は早く日本の叔母の元へ帰り、また、物語を書き継ぐ忍従^たの生活に親しみ度^たい心のコースが自然私に向いて来た。

私たちからは内地の話や、男からは南洋の諸国の話が、単なる座談として交わされた。社長は別室へ酔後の昼寝をしに行った。

この土地常例の驟^{スコール}雨があつて後、夕方間近くなつて、男は私

だけに向つて、

「ちよつとその辺を散歩しましょう。お話もありますから」と云つた。

私は娘の顔を見た。娘は「どうぞ」と会釈した。そこで私は男に連立つて出た。雨後すぐに真白に冴えて、夕陽に瑩光を放つている椰子林の砂浜に出た。

スコールは右手の西南に去つて、市街の出岬の彼方の海に、まだいくらか暗沫あんまつの影を残している。男はその方を指して「こつちはスマトラ」それからその反対の東南方を指して「こつちはボルネオ」、それから真正面の青磁色の水平線に、若い生姜しょうがの根ほどの雲の峯を、夕の名残りなごに再びひろ拈ひじている方を指して、「ず

「つと、この奥に爪哇ジャバがあります。みな僕の船の行くところですよ」

彼は一本の椰子の樹の梢こずえを見上げて、その雫しずくの落ちない根元の

砂上に竹笠たけがさを裏返しに置き、更にハンケチをその上に敷き、

「まあ、この上に腰を降ろして頂きましようか」

そして彼は巻まきた蓆たばこを取り出して、徐ろおもむに喫すっていたが、やが

て、私から少し離れて腰をおろして口を切りだした。海を放浪する男にしては珍らしく律儀な処のある性質も、次のような男の話で知られるのであった。

「お手紙で、あの娘と僕とにどうしても断ち切れない絆きずながあるこ

とは判りました。実はその絆が僕自身にも強く絡まっわっていたのがはつきり判ったのでご座います。それをご承知置き願って、これ

から僕の話すことを聞いて頂き度いのです。でない、僕がここへ来て急に結婚に纏まとまるのが、単なる気紛きまぐれのように当りますか
ら」

彼は、私が大体それを諒りようかい解かいできても、直すぐさま承認出来な
いで黙っているのを見て取つてこう云つた。

「僕と許いいなすけ婚けも同様なあれと僕との間柄を、なぜ僕がいろいろ
と迷つて来たか、なぜ時には突き放そうとまでしたか、この理由
があなたにお判りになつていらつしやらないかも知れませんが：
…いやあなたばかりではない、あれにもまだ判つていない……」
彼はしまいを独言にして一番肺の底に残して置いたような溜ためい
息きをした。私は娘の身の上を心配するについての曾かつての焦立いらだた

しい気持ちに、再び取りつかれ、ついこういつてしまった。

「多分あなただけのお気持ちでしょう、そんなこと、私たちには判らなかつたからこそ、あの娘さんは死ぬような苦しきもし、何のゆかりも無い私のようなものまで、おせっかいに飛び出さなくてはならない羽目に陥って仕舞つたのですわ。」

私の語気には顔色と共になりに険しいものがあつたらしい。すると、彼は突き立てている膝ひざと膝との間で、両手の指を神経質に編み合せながら、首を擡もたげた。

「もつと尤もです。しかし、僕自身の気持ち、僕にはつきり判つたのも、矢張りあなたが仲に入られたお陰なんです。その前まではただ何となくあの娘は好きだが、あの娘も女だ。あの娘も女だと

いう事が気に入らない。ぼんやりこの二つの間を僕は何百遍となく引ずり廻まわされていました。僕とて永い苦しい年月でした。ま、とにかく、僕の身の上話を一応訊きいて下さい。第一に僕の人生の出発点からして、捨子という、悲運なハンディキャップがついてるんです。」

彼の語り出した身上話とは次のようなものであつた。

東京の日本橋から外濠そとほりの方へ二つ目の橋で、そこはもはや日本橋川が外濠に接している三叉さんさの地点に、一石橋がある。橋の南詰さの西側に錆び朽ちた、「迷子のしるべの石」がある。安政時代、

地震や饑饉ききんで迷子が夥おびただしく殖えたため、その頃あの界限かいわいの町名主等が建てたものであるが、明治以来殆ど土地の人にも忘れられていた。

ところが、明治も末に近いある秋、このしるべの石の傍に珍らしく捨子がしてあった。二つぐらいの可愛かわいらしい男の子で、それが木下であった。

その時分、娘の家の堺屋は橋の近くの西河岸に住宅があったので、子のない堺屋の夫妻は、この子を引き取って育てた。それから三年して、この子が五つになった時分に、近所に女中をしていた女が、堺屋に現れて、子供の母だと名乗り出た。彼女は前非を悔い、不実を詫わびたので、堺屋ではこの母をも共に引き取った。

母は夫と共に日露戦役後の世間の好景気につれ、東京の下町で夫婦共稼ぎの一旗上げるつもりで上京して来た。そういう夫婦の例にままあるとおりの無理算段をして出て来た近県の衰えた豪家の夫妻で、^{たちま}忽ち失敗した上、夫は病死し妻は、今更故郷へも帰れず、子を捨てて、自分は投身しようとしたが、子のことが気にかかり、望みを果たさなかつた。そして西河岸の同じ町内に女中奉公をして、陰ながら子供の様子を見守っていたのだった。

堺屋では、男の児の母を家政婦みたように使うことになった。母は忠実によく勤めた。が、子供のことに係ると、堺屋の妻とこの母との間に激しい争いは絶えなかつた。

一度捨てたものを拾って育てたのだから、この子はわたしのも

のだと、堺屋の妻は云った。一度は捨てたが、この子のために死に切れず、死ぬより辛い恥を忍んで、世間へ名乗り出ることさえした位だから、この子はもとより自分のものだ、木下の母は云った。

「よく考えてみれば、僕にとっては有難いことなのでしようが、僕は物心ついてから、女のこの激しい争いに、ほとほと神経を使い枯らし、僕の知る人生はただ醜い暗いものばかりでした」

生あいにく憎なことに、木下は生みの母より、堺屋の妻の方が多少好きであつた。

「堺屋のおふくろさんは、強情一徹ですが、まださっぱりしたところがありません。が、僕を自分ばかりの子にして仕舞いたかつ

た気持ちには、自分に男の子がないため、是非欲しいという量見以外に、堺屋の父親が僕をとて愛しているのです、それから牽ひいて、僕の生みの母親をも愛しはしないかという心配も幾らかあつたらしいのです。こういう気持ちも混つた僕への愛から、堺屋のおふくろは、しまいには僕だけ自分の手元にとどめて、母だけ追出そうとしきりに焦つたのです。それでも堺屋の母はただ僕の母に表向きの難癖をつけたり、失敗を言い募つたりする、まだ単純なものでした」

ところが、木下の生みの母はなかなか手のある女だった。

「一度こういうことがありました。堺屋のおふくろが、僕に搔かきも餅ちを焼いて呉くれていたんです。その側には僕の生みの母親もい

ました。堺屋のおふくろは、焼いた搔餅を普通に砂糖醬油さとうじょうゆにつけて僕に与えました。すると僕の母はそれを見て、そつとその搔餅を箸はしで摘み取り、ぬるま湯で洗つて、改めて生醬油きじょうゆをつけて、僕に与えました。僕は子供のうちから生醬油をつけた搔餅が好きだつたのです」

しかし、いくら子供の好みがそうだからと云つて、堺屋のおふくろに面当てがましく、搔餅を目の前で洗い直さないでもよさそうだと木下は思った。その上子供の木下に向つて、搔餅を与えながら、一種の手柄顔と、媚こびと歡心を求める造り笑いは、木下に嫌けんえん厭を催させた。堺屋のおふくろは箸はしを投げ捨て、怒つて立つて行つた。

「また、こういうことがありました。僕が尋常小学に入った時分でした。その夜は堺屋で恵比須講えびすこうか何かあつて、徹夜の宴会ですから、母親は店へ泊つて来る筈はずです。ところが夜の明け方まえになつて、提灯ちようちんをつけて帰つて来ました。そして眼を覺ました僕の枕元に座つて、さめざめと泣くのです。堺屋のお内儀かみさんに満座の中で恥をかかされて、居たたまれなかつたと云います」

これも後で訊ね合せて見ると、母親の術であるらしく、ほんのちよつとした口叱言くちごごとを種に、子供の同情を牽ひかんための手段であつた。

「何でも下へ下へと搔かい潜つて、子供の心を握つて自分に引き付けようとするこの母親の術には、実に参りました。子供の心は、

そういうものには堪えられるものではありません。僕は元来そう頭は悪くない積りですが、この時分は痴呆症ちほうしょうのようになって、学校も仮及第ばかりしていました」

木下が九つの時に堺屋の妻は、女の子を生んだ。それが今の娘である。しかし、堺屋の妻は、折角楽しんでいた子供が女であることや、木下の生みの母との争奪戦最中の関係からか、娘の出生をあまり悦よろこびもせず、やはり愛は男の子の木下に牽ひかれていた。

木下の母親は、「自分に実子うかがが出来た癖に、まだ、人の子を付け覗のぞつている。強慾ののしな女」と罵ののつた。

ところが、晩産のため、堺屋の妻は兎角病とかく気勝ちで、娘出生の後一年にもならないうちに死んで仕舞った。

その最後の病床で、堺屋の妻は、木下の小さい体を確しつり抱き締めて、「この子供はどうしてもあたしの子」とぜいぜいいて叫んだ。すると生みの母親は冷淡に、「いけませんよ」といって、その手から木下を靠もぎ去った。堺屋の主人は始め不快に思ったが、生みの母のすることだから誰も苦情はいえなかった。

すると堺屋の妻は、木下の母親には、今まで決して見せなかつた涙を、死の真近になつた顔にぼろぼろと零こぼして、「なるほど考えてみると、今までは私が悪かつた。謝るから、どうかこのことだけは一つ自分の遺言だと思つて、聴容ききこれて貰たい度い」と云つて、次のことを申出た。つまり自分の生んだ女の子が育つて、年頃になつたなら、必ず木下と娶めあわして欲しいというのであつた。木下

の母親もそれまでは断る元気もなく、しぶしぶ承知の旨を肯うなずいて見せた。すると堺屋の妻はまだ本当には安心して切らないような様子で半眼を開いて、じつと母と僕と娘の顔を見較みくらべながらやがて死んだ。木下の母親は堺屋の妻の死後までその時の様子を憎にくんでいた。

娘は乳母を雇って育てられた。木下の母親は自然主婦のような位置に立って、家事を引受けていたが、不思議な事には喧嘩けんか相手の無くなったことに何となく力抜けのした具合いで床につき勝ちになり、それから四年目の木下が十三歳、娘が五つの年に腹膜炎で死んだ。

そのとき木下の母親の遺言はこうであつた。

「ここの家のお内儀さんとの約束だから、息子にお嬢さんを貰うことは承知するが、息子をこの家の養子にやることはどうしても否や。なにしろこの息子は木下家の一粒種なのだから……」

母親はふだんから、世が世ならば、こんな素町人の家の娘をうちの息子になぞけんぺい権柄いずくで貰わせられることなぞありはしない。資産から云ったって、木下家の郷里の持ものは、人に奪とられさえしなければ、こんな家とは格段の相違があるのだといっていた。

娘は乳母に養われ父親だけで何も知らずに育ち、木下は店から通って、中学から高等学校に上って行つた。

「嫌なものですよ。幼な心に染しみ込んだ女同志の争いというもの、中に入っているのが子供で何も判るまいと思うだけに、女た

ちはあらゆる女の醜さをさらけ出して争います。それはずーっといつまでも人間の心に染みついて残ります。僕は堺屋のおふくろが臨終に最後の力を出して、僕を母親から奪おうとしたときの、死にももの狂いの力と、肉身を強味に冷やかに僕を死ぬ女の手から靠ぎ取った母親の様子を、今でもありありと思ひうか泛うかべることが出来ます」

それは嫌やだと同時に、またどうしても憎み切れないものがある。家というものをまも護まもらせられるように出来ている女の本能、最後の頼りを想おもう女の本能、そういうものが後先の力となって、自分で生むと生まないとに係らず、女が男の子というものに対する魅着は、第一義的の力であるのであろう。

「そういつちや何ですが、僕は子供のときはおっとりして器量もなかなかよく、つまり、一般の母性に恋いつかれるようになって来た子供だつたらしいのです」木下は苦笑しながら云つた。

娘は片親でも鷹揚おうように美しく育つて行つた。いつの間に聞き込んだか、木下と許いいなづけ婚の間柄だと知つて、木下を疑わず頼りに思い込んでいる。ところが女の為に女を見る目を僻ひがませられて仕舞つた若い頃の木下には、娘がやさしくなつかしそうにする場合には、例の母親がした媚こびて歎心を得る狡ずるい手段ではないかと、すぐそれに対する感情の出口に蓋ふたをする気持ちになり、娘が無邪気に開けて向つて来るときは、堺屋のおふくろがした女の氣儘きまま独断を振り翳かざして来るのではないかと思つて、また、感情に蓋ふたをす

る。

「今考えてみれば、僕は僻ひがみながらも僕の心の底では娘が可哀かわいそ想うで、いじらしくてならなかったのです」

「僕はこの二重の矛盾に堪え切れないで、娘に辛く当たったり、娘をはぐらかして見たり、軽けい蔑べつしてみたり、あらゆるいじけた情熱の吐き方をしたものです。そうしたあとでは、無垢むくな、か弱いものを惨忍に踏み躪にじつた悔いが、ひしひしと身を攻めて来て、もしやこのことのために娘の性情が壊れて仕舞ったら、どうしたらいいだろう……」

彼が学問で身を立てるつもりで堺屋の主人に頼んで、段々と上の学校へ上げて貰おうとしたのは、学問の純粹性が彼に沁しみ込ん

で、それによつて世の中を見るようになって、女の持つ技巧や歪わいきよく

曲まがの世界から脱れようかとも思つた。ところが、彼が青年になり、青春の血が動くようになるほど、娘のことを考え、この自分の矛盾に襲われ、結局しどろもどろになつて、落付いて学問なぞしていられず、娘を愛しながら、娘の傍にはいたたまれなくなつて来た。そうかといつて、他の女はもつと女臭いものが、より多くあるような気がして女がふつふつ嫌であつた。

とうとう彼は二十一の歳に高等学校をやめて、船に乗り込んで仕舞つた。

娘は何も知らずに、木下がやさしい性情が好きなのだと思ひ取つては、そのようになろうと試み、木下がさっぱりした性格を好

むと思ひ取つては、男のようになって働きもした。木下は迷つて
することだが、娘はただ懸命につき従おうと心を砕いた。

「結局あの娘の持ち前の性格をくたくたに突き崩して、匂いにおのな
いただ美しい造花のようにしてしまつたのは、僕の無言の折檻せつかん
にあるのでしよう。それとも女というものは、絆きずなのある男なら誰
に対しても遂ついにそうなる運命の生物なのでしようか」

青年の木下は、それを憐あわれみながら、いよいよ愛する娘を持て剩あま
した。

「けれども、海は、殊に、南洋の海は……」と木下は言葉を継い
だ。「海は、南洋の海は……」現実を夢にし、夢を現実にして呉く
れる、神変不思議の力を持っている。むかし印度インドの哲学詩人たち

が、ここには竜宮というものがあつて、陸上で生命が屈くつ托たくするときに、しばらく生命はここに匿かくれて時期を待つのだといった思想などは、南の海洋に朝夕を送つてみたものでなければ、よく判らないのである。ここへ来ると、生命の外殻の観念的なものが取れて、浪漫性の美と匂いをつけ、人間の嗜味に好ましい姿となつて、再び立ち上つて来るとかいうのである。

「あなたは東洋の哲学をおやりだという話を、あれの手紙で知りましたが、それなら既にお氣付きでしょう。およそ大乘と名付けられる、つまり人間性を積極的に是認した仏教經典等には、かなりその竜宮に匿かくれていたの取出して来たという伝説が附ものになつていましょう。その竜宮を、或は錫セイロン蘭島だといい、いや、

架空の表現なのだとか、いろいろ議論がありますものの、大体北方の哲学の胚種はいしゆが、後世文化の発達した、これ等南の海洋の氣を受けた土地に出て来て、伸々と芽を吹き、再生産されたことは推測されましょう」

木下はなお南洋の海に就ついて語り続ける。

遠い水は瑠璃色るりいろにのして、表面はにこ毛が密生しているように白っぽくさえ見える。近くに寄せる浪のうねりは琅玕ろうかんの練りもなのように、悠揚と伸び上つて来ては、そこで青葉の丘のようなポーズをしばらく取り、容易には崩れない。浪間と浪の陰に当るところは、金沙きんさを混ぜた緑礬液りよくばんえきのように、毒と思えるほど濃く凝つて、しかもきらきら陽光を漉すき込んでいる。片帆の力を借

りながら、テンポの正規的な汽罐きかんの音を響かせて、木下の乗る三千噸トシの船はこの何とも知れない広大な一鉢の水の上を、無窮に浮き進んで行く。舳へさきの斜の行手に浪から立ち騰のぼつて、ホースの雨のように、飛魚の群が虹のような色彩に閃ひらめいて、繰り返し繰り返し海へ注ぎ落ちる。垣のように水平線をぐるりと取巻いて、立ち騰つてはいつか潰つぶえる雲の峯の、左手に出た形と同じものが、右手に現れたと思うと、元のものはずでに形を変えている。

積荷の塩魚のにおいの中から、ふとすると、寒天や小豆粉のかすかなにおいがする。陸地に近づくと大きな蝶が二つ海の上を渡つて来る。

「この絢爛けんらんな退屈を何十度となく繰り返しているうち、僕はい

つの間にか、娘のことを考えれば、何となく微笑が泛うかべられるように悠揚とした気になって来ました。「娘のすることなすことを想像すると、いたいけな気がして、ただ、ほろりとする感じに浸れるだけに彼はなつて来た。で、今まで嫌やだと感じる理由になつていた、女嫌いの原因になるものは、どうなつたかというと、彼の胸の片隅の方に押し片付けられて、たいして邪魔にもならなくなつて来た。いつの間にか人をこうした心状に導くのが南の海の徳性だろうか。

男はここまで語つて眉まゆがしら頭つを衝き上げ、ちよつと剽ひようきん軽な表情を泛べて、私の顔を見た。

「そこへあなたのご周旋だったので、ありがたくお骨折りを受け

容れた次第です」

ここで私は更に男に訊ねて見なければ承知出来なかつた。

「そういうことなら、なぜ娘さんにその気持ちの径路を早く行って聞かさないで、こんな処で私一人に今更打ち明けるのですか」

「ははあ。」といつて男は瞑目していたが、やがて尤もという様子でいった。

「今までの話、僕はあなたにお目にかかつてどうしても聞いて頂き度くなつたのですが、これをあの娘に直接話したら……」だんだん判つて来たのだが元来あの娘には、そういった女臭いところが比較的少ない。都会の始終刺戟に曝らされている下町の女の中には、時々ああいう女の性格がある。だが若しそんな話をして、

いくらかでも、却^{かえ}つて母親達のような女臭さをあの娘に植えつけは仕ないだろうか、今はあんな娘であるにしても根が女のことだから、今は聞き流していても、それを潜在意識に貯えて、いつ同じ女の根性になつて来ないものでも無い……そんな怖^{おそ}れからこれは娘には一切聞かせずに、いつそのことお世話^{ついで}序にあなたにだけ聞いて頂くこうと思つた。世の中の男のなかにはこういう悩みを持つものもあるものだ、了解して頂き度い……と男の口調や態度には律義ななかに頼母^{たのも}しい才気が閃くのだつた。

陽^{ほとん}は殆ど椰子林に没して、酔い痴^しれた昼の灼^{しゃく}熱^{ねつ}から醒^さめ際の冷水のような澄みかかるものを湛^たえた南洋特有の明媚^{めいび}な黄昏^{たそがれ}の気配^こいが、あたりを籠^こめて来た。

さき程から左手の方に当ってカトン岬見物の客を相手に、椰子の木に上つては、椰子の実を採つて来て、若干の錢を貰つていた土人の子供の猿ましらのような影も、西洋人のラツパのような笑声も無くなった。さざ波が星を呼び出すように、海一面に角立っている。

私はこの真摯しんしな青年の私に対する信頼に對して、もはや充分了解が出来ても、何か一言詰なじらないではいられない、やや皮肉らしい気持ちで云つた。

「あの娘さんも随分私にご自分の荷をかずけなさいましたが、あなたも最後の捨荷を私にかずけなさいますのね」

そう云いながら、私は少し声を立てて笑つた。それは必ずしも不平でないことを示した。

男はちよつとどぎまぎして、私の顔を見たが、必ずしも私が不平ではない様子を見て取つて、自分も笑いながら、

「やあ、御迷惑をかけたもんですなあ……でも、そういう役目も文学をやる方の天職じゃないのですか。何でもそういう人間の悩みを原料として、いつかそれを見事に再生産なさることが……」

「さあ、どうですか。……それもかなりあなたの虫の好い解釈じやありませんか……」私はまだこんな皮肉めいたことを云い^{なが}乍ら^{くつろ}も、もはや完全にこの若者に好感を感じて言葉の末を笑い声に寛がした。

「やあ、どうも済みませんですなあ……は、は、はは」男も充分に私の心意を感じていた。

「この広々とした海を見てみると、人間同志そのくらいな精神の負担の融通はつきそうに思えますわ」私は最後に誰に云うともなく自分ながらおかしい程頼母しげな言葉を吐いた。

さつきからこまかい虫の集りのように蠢うごめいていた、新嘉坡シンガポールの町の灯がだんだん生き生きと煌きらめき出した。日本料理店清涼亭の灯も明るみ出した。

話し疲れた二人は暫しばらく黙もっていた。

波打際をゆつくりと歩いて来る娘と社長の姿が見えた。蛍の火が一すじ椰子の並木の中から流れてきた。娘は手に持っていた団う扇ちわをさし上げた。蛍の光はそれにちよつと絡まとわつたが、低く外れて海の上を渡り、また高く上つて、星影に紛れ込んで見えなくな

った。

私はいま再び東京日本橋箱崎川の水に沿った堺屋のよとの私の部屋にいる。日本の冬も去つて、三月は春ながらまだ底冷えが残っている。河には船が相変わらず頻繁に通り、向河岸の稲荷いなりの社には、玩具がんぐの鉄兜てつかぶとを冠かぶつた可愛かわゆい子供たちが戦ごっこをしている。

その後の経過を述べるところである。

私は遮二無二新嘉坡シンガポールから一人で内地へ帰つて来た。旅先きでの簡単な結婚式にもせよ、それを済ましたあとの娘を、直すぐに木

下に托^{たく}するのが本筋であると思つたからである。陸に住もうが、海に行こうが、しばらくも離れずにいることが、この際二人に最も必要である。場合によってはと考へて、初から娘の旅券には暹^シ羅^{ヤム}、安南、ボルネオ、スマトラ、爪哇^{ジャバ}への旅行許可証をも得させてあつたのが、幸だつた。

私はうすら冷たくほのぼのとした河明りが、障子にうつるこの室に座りながら、私の最初のプランである、私の物語の娘に附与すべき性格を捕捉^{ほそく}する努力を決して捨ててはいない。芸術は運命である。一度モチーフに絡^{から}まれたが最後、捨てようにも捨てられないのである。その方向からすれば、この家の娘への関心は、私に取つて一時の岐路であつた。私の初め計^{けい}劃^{かく}した物語の娘の創

造こそ私の行くべき本道である。

だが、こう思いつつ私が河に対するとき、水に対する私の感じが、殆ど前と違っているのである。河には無限の乳房のような水源があり、末にはまた無限に包容する大海がある。この首尾を持ちつつ、その中間に於ての河なのである。そこには無限性を蔵さなくてはならない筈である。

こういうことは、誰でも知り過ぎていて、平凡に帰したことだが、この家の娘が身を賭けるようにして、河上を探りつつ試みたあの土俗地理学者との恋愛の話の味い、またその娘が遂に流れ定つて行った海の果の豊饒を親しく見聞して来た私には、河は過程のようなものでありながら、しかも首尾に対して根幹の密接

な関係があることが感じられる。すればこの仄ほのかな河明りにも、私が曾かつて憧憬していたあわれにかそけきものの外に、何か確乎かつことした質量がある筈である——何かそういうものが、はつきり私に感じられて来ると、結局、私は私の物語の娘の性格の更生に、始めから私の物語を書き直す決意にまで、私の勇気を立至らしめたのである。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第5巻」小学館

1986（昭和61）年12月1日初版第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第四巻」冬樹社

1974（昭和49）年3月18日初版第1刷発行

初出：「中央公論」

1939（昭和14）年4月号

※疑問箇所の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。

※「木下はなお南洋の海に就《つ》いて語り続ける。」は、底本でも、底本の親本でも改行天付きになっています。

入力：阿部良子

校正：松永正敏

2004年1月30日作成

2013年10月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

河明り

岡本かの子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>